Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-12

サッカー研究(4) 日本代表監督に関する一考察

加納, 哲也

(Citation)
神戸大学発達科学部研究紀要,9(2):181-211

(Issue Date)
2002

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81000481

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000481

神戸大学発達科学部研究紀要
第9巻第2号　2002

サッカー研究（4）
日本代表監督に関する一考察

加納哲也*

A Study of Association Football (Part 4)：
A consideration on JAPAN national team manager

Tetsuya KANO

第1章　はじめに

日本サッカーの世界へのデビューは奇跡から始まり、しかも、どの舞台もオリンピック大会だった。すなわち、1936年のベルリン大会では、当時は参加表明国が16カ国しかなく予選なしでトーナメント1回戦で優勝候補と言われたスウェーデンを3-2で下し「ベルリンの奇跡」を起こした。

また、1964年の東京大会では予選において、南米のプロ予備軍であるアルゼンチンに勝ち「東京の奇跡」と言われた。さらに、決勝トーナメントに進出したが、チェコスロバキアに0-4と大敗し、結果的にはベスト8止まりに終わり奇跡と屈辱も同時に味わった。

我が国のサッカーが奇跡と屈辱を味わいながらも、その発展には幾多の外国人による指導の影響を受けて来たが、オリンピック東京大会（1964年）、メキシコ大会（1968年）の輝かしい成績はデトマール・クラマー(Dettmar Cramer・ドイツ）の功績によるところが大きいことはよく知られている。それ以前、すなわち1930年（昭和5年）の極東選手権およびベルリン大会における奇跡とも思える成績は、ビルマから東京高等工業学校への留学生であるチョー・ディン(Kyaw Din)の指導から生まれたと言える。1921年（大正10年）の初海外遠征（上海）に代表チームの全関東蹴球団がチョー・ディンの指導を受けたとの記述が『日本サッカーのあゆみ』に見られ、これが日本チームが外国人にコーチを受けた最初と言われている。

指導の要点は、サッカーのごく基本的な技術を自ら正しい技術で示し、科学的にサッカーを考える道を広げた。1923年（大正12年）『How to play Association Football』なるサッカー書を発刊し、当時、学生の間で盛んだったサッカーにチョー・ディンの理論をさらに展開させ、ショートパス戦法を身につけ、1927年（昭和2年）の極東大会でフィリピンに対外試合で初勝利を記録した。このことは、それまでの日本サッカーがイギリス人によって伝えられ独自性が見いだせないまま、模倣から抜け出せなかったことを物語っているとも言える。

さらに、日本サッカー協会は、オリンピック東京大会を開催するにあたり、デットマール・クラマーを招聘し、1960年以来、基本技術の重要さを徹底的に指導され、欧州遠征を敢行するなどの強化を受けた。また、オリンピック終了後の1965年から企業クラブ中心の日本リーグを発足させ、最初のサッカーブームと言われる現象を作り出した。そして、1968年メキシコ大会では、堂々の3位銅メダルの

*神戸大学発達科学部身体行動論

(2001年4月26日　受付
2001年5月18日　受理)

獲得という形でクラマー効果が本当に実を結んだと言える。

このように奇跡と屈辱の道筋を辿り、何とか現在の日本サッカーを支えてきたのは、「プレ・プロフェッショナル世代」で、アマチュアだった当時、日本の最高目標はオリンピックであり、世界選手権大会（World-Cup：以下W杯と表す）は、はるか彼方の夢物語だった。むしろ、それこそが最大の屈辱であり、それ以後、永い間、銅メダルを越える何かを得ることができなかった。

しかし、28年ぶりの1996年アトランタ大会にいたり、1993年に発足したＪリーグの選手、すなわちプロフェッショナル世代の到来となった。1988年ロスアンジェルス大会からプロ解禁となり、1992年バルセロナ大会からは23歳以下という年齢制限が設けられたが、1996年アトランタ大会の予選で対戦したブラジルは初めて採用された「オーバーエイジ」の３人枠も使っていた。したがって、ブラジルはオリンピックと言えども、「ドリームチーム」で大会に臨んだが、日本は、そのブラジルを1-0で下し「マイアミの奇跡」を起こした。

このように、ようやく日本サッカーもプロ世代に突入し、世界の皮膚感覚が刻まれ始めW杯も夢ではなくなり、1998年W杯フランス大会への初参加が許されるまでに至った。しかし、結果は予選リーグ3戦3敗、1得点4失点で勝ち点0という結果で真の世界戦への初挑戦は終わった。

「奇跡」と言う言葉は残酷でもあり「あり得ないことを実現する」という点において、日本のこれまでの奇跡は、スウェーデンやブラジルには勝てるはずがない、あるいは銅メダルがとれるはずがないという認識だったのであるが、ようやく20世紀の終盤にいたり、Ｊリーグの発足、トレーニング・センターシステム効果による若手の驚異的な成長が見られ、プロというサッカー環境が与えられた第１世代の誕生により、世界で日本サッカーがどれほどのものかと言う模索が可能になった。

そこで本稿においては、このような日本サッカーのあゆみと指導者との観点から、特に日本が世界サッカーに注目するようになった1980年代後半から現在に至る歴代代表チーム監督や外国人指導者が、日本サッカーに如何なる影響を与えたか、過去の戦績などを参照し、さらに、日本サッカーが求める指導者（監督）像を検討しみたい。

第２章　監督の誕生と変遷

サッカーの監督は、選手、監督がプロであるがゆえ成績という指標により評価され、多数の監督が解雇されるという現状であるが、このことは勝敗がすべてであることを物語っている。

そこでまず、サッカーの「監督」(Team manager)がどのような経緯で誕生し、現在に至っているかを知るため、主にサッカーの母国であるイングランドの事象について検討してみる。

イングランドでは、もともとアマチュア精神が尊重され、監督という職業は存在していなかった。そして、アマチュアの意味は、「金銭的報酬を受けない」という意味だけではなく「誇り高い」あるいは「中流階級以上の」という意味を含んでいたのである。

1863年のイングランド・サッカー協会（Foot Ball Association：以下FAと表す）の設立当時、選手も役員もアマチュアが主流だった。この頃のプレースタイルは、自由奔放で個人プレーの傾向が強く、チームよるトレーニング、作戦の打ち合わせなどは全く行われず「監督」等という概念すら生まれることはなかった。

しかし、第１次世界大戦以前にリーグを形成していたクラブの運営形態は曖昧で、役員会が資金繰りから、スカウト、選手選抜まで全てを行っていた。つまり、現在の監督の役割と思えるような業務を全て役員会が関わっていたということである。各クラブは有限会社の形式をとり、クラブには秘書官の職があったが、クラブ経営に関する権限はいっさい持たされていなかった。クラブに関する決定権は全て役員会が持ち、選手との交渉などはすべて秘書官が行っていた。第１次世界大戦直前になると、役員会がクラブ運営の手綱は握っていたものの選手の評価、移籍に関しては、次第に秘書官ある

いは秘書兼マネージャーにまかせるようになった。

その結果、やがて秘書兼マネージャーが、チームの責任を取らされるようになるが、この秘書兼マネージャーポストの生まれた背景には、選手を他のクラブや地方から連れてくる必要性が急速に認識され出した。またクラブ経営には大変手間がかかり、また時間がかかる仕事になってきたことや、国家体制への不安と社会階級の対立が先鋭化していた時期であり、役員の多くがプロサッカー選手を社会的に低い地位と見なしていたため、直接の関わりを避けたいという意向が見られ始めた。さらに、地元の熱狂的な労働者階級のファンを前に、誰かに責任を押しつけようとするようになったことが考えられる。しかも、サポーターの不安定な心情は日々顕在化し、ピッチ（競技場）への侵入などはプロリーグ発足当時から見られており、フーリガンの活発化は近年の傾向と思われがちであるが、実は当時も珍しいことではなかった。

このようにして、役員会と秘書兼マネージャーの役割が明確になってきた1930年代前半には、試合の現場に一番近い秘書兼マネージャーが監督として作戦面に関わる場面も見られるようになった。しかし、これはごく一部に過ぎず、当時の監督はただの飾り物にすぎないようなクラブも多くあった。

その後、次第に監督のポストが確立されるようになり、それにともない役員会はチームの成績の責任を監督に負わせるようにしたのである。それまでの監督の実態は、勤務時間の大半はデスクワークであり、他の試合を観戦し、選手のリクルートなどにあたるだけで、もちろんプレーに関して指導するようなことは全くなかった。一方、選手側では試合に備えての戦術的なトレーニングなどを望むようになり、監督の中には、これに呼応しようとする者も現れ始めた。選手からは役員の責任回避や、権利の行使のみを強調することに対する不満や反感が噴出するようになり、まして、役員が選手としてプレー経験のないことからファンの心理がどのようなものであるかも理解されていないという実態があった。

このようにして一般サッカーファン（現在のサポーター）が監督に注目するようになり、これに伴い監督の業務も次第に明確化されていった。

さらに、1919年以降には一般大衆紙によりサッカーが大きく扱われるようになったが、役員会のメディアに対する折り合いは非常に悪かった。すなわち、横柄な態度か、全く事情を理解していないかのどちらかであり、このことは逆に監督にとっては非常に都合の良いことになった。監督は実際にチームの舵取りを任されるようになり、世評に非常に敏感になるとともに、自分の仕事が世間に認知されることになった。

新聞のスポーツ報道は、大衆の側に立とうとしない役員達をやり玉に挙げ、チーム運営はサッカーのプロである監督に任せろとした。

サッカーに関する話題は次第に監督中心になり、メディアにより一層大げさに記述されるようになった。このことはサッカー界で力関係が変化したことを示すものであり、特に戦後、この変化に関して重要なことは、FAによりコーチ養成コースが始められたことや、1961年にサッカーリーグの選手に対する報酬の上限が撤廃されたことである。さらに1960年代半ばからサッカーの試合がテレビ放映されるようになったことは、従来のサッカー界を決定的に変化させた。

コーチングに関し歴史的には、勝敗に無頓着なアマチュアに対して強すぎるがために卑しめられた初期のプロ選手が持っていた意識と密接に結びついている。1900年代初頭からイングランドの元選手達は国外、特にハンガリー、オーストリア、スカンジナビアなどでコーチを勤めていた。しかし、イングランドにおいてはコーチ活動に対する援助は少なくとも1930年代半ばになって、サー・スタンリー・ラウスがFAの理事に任命されるまで殆ど行われなかった。

ラウスは1934年にスポーツ界の流れから取り残され形骸化したFAを受け継いだが、その頃までに、近代スポーツの政治的重要性と商業的可能性によりオリンピックのような国際的競技会に大衆の大き

な支持が集まるようになっていた。

W杯と名のつく他の競技種目も多く開催されるようになっていたが、FAは当時孤立主義を標榜し、1904年に設立された国際サッカー連盟（FIFA）にも加盟せず、1930年に開催された第1回W杯（ウルグアイ）にも出場を辞退している。このような背景の中でラウスはサッカー界に対する長期的ビジョンを持ち、公式な資格ができれば職業としてサッカーの社会的評価を高められると考え、FAでコーチ養成コースを開始した。

従来、自国のサッカーには外国から学ぶべきことはないと考えていたのに対し、ラウスは世界各地で急速に発展したサッカーの水準も上がっていることを認識し、1946年FA最初のコーチ責任者としてウォルター・ウィンターボトムを任命し、そして同時にイングランド代表監督も兼任させたのである。これがサッカーの母国イングランド代表チームの初代監督である。

「監督」という職業が完全に認知されたことにより、それまでのクラブ内における立場に大きな変化が見られ、それぞれの国の代表、クラブチームにとって技術的、戦術的トレーニングのみならずチーム運営には欠かせない立場が確立され、チームの成績がより重要視されるようになった。

なかでも現代サッカーの流れを大きく変化させたのはWMシステムの登場である。これはオフサイドルールの改正により生まれたシステムであるが、ボールがフィードされた瞬間にゴールと守備側選手が3人以上いなければオフサイドとされていたルールが、攻撃側に有利な現行の2人オフサイドに変更された。この変更により従来の2バックシステムでは守備側の対応が相手に対して困難になり、ラインを3人に下げる必要が生じ、ハーバート・チャップマン（アーセナル・イングランド）により考案されたシステムである。このシステムは、それ以後1960年代までの長い間サッカーの基本システムとして生き続けることになる。

その後、サッカーでは質的な変化が多く見られ、なかでもカール・ラッパン(Karl Rappan・オーストリア）により編み出されたボルト・システムを挙げることができる。これはWMシステム以前の2バックシステムを基本としながら、各ポジションに2つの役割を持たせることにより攻守に厚みを加えた。当時のサッカーは攻守分業だったが、このシステムでは、ある程度オールラウンダー的な能力を要求した点で将来を先取りした戦術だったと言える。

1964、65年のクラブチャンピオンに輝いたインテル・ミラノ（イタリア）を率いたエレニオ・エレラ（アルゼンチン）は、カテナチオ（鍵をかける）を世界に知らしめた監督である。イタリアではいかに得点を取られないかが主要な戦術であり、カテナチオを組織したことより、むしろ堅い守備からカウンターアタックを成功させたことを高く評価された監督として名をなした。

さらに1974年W杯ドイツ大会におけるオランダの活躍ではトータル・フットボールという言葉を生みだした。リヌス・ミケルス（オランダ）の最高傑作と言われ、攻撃的選手を有効に使う斬新かつ画期的なシステムであった。このシステムはプレッシング・サッカーとして現代サッカーの主流スタイルとなっているが、このころ既に一つの戦術として採用されていた。これはオフサイド・トラップ、攻守の素早い切り換え、ポジションにこだわらないローテーションアタックがその主流であり、負けないためには相手陣内で攻め続けることを主体にした戦術だった。

このようにかっては過去、名監督と謳われた所以は、戦術的策略や試合のやり方などに関する主張により、新しい監督像を作り上げたが、現代サッカーにおいてはこうした発表会的なことについては既に終止符が打たれたと言える。

かってクラブの秘書兼マネージャーとして存在したクラブの一メンバーが、いまや国を代表するチームあるいはクラブの浮沈さえ握る重要な立場で君臨しているのが現在の「サッカー監督」である。

第3章　監督のタイプ

我が国では「プロ野球監督」と「サッカー監督」が対比される場合が多い。チーム・スポーツとして興行をする二つの種目であり、勝敗が常にその評価の対象とされているから無理もないことである。日本に野球というチーム・スポーツの伝統があり、スポーツ新聞などのメディアにおいても野球報道の文脈をサッカーなど他のスポーツに持ち込むことが多く見られる。

野球の場合はワン・プレーごとに試合は停止し、監督の指示（サイン）で試合が再開されるので、試合そのものが監督によって運ばれている印象を非常に強く受ける。従って、野球の場合は、監督の采配能力が非常に重要になることを示し、そうした文脈で報道される場合が多い。

しかし、サッカーは初期の段階では監督そのものが存在しなかったのであるから、チームは外部からの指示を受けることなく、状況の変化に戦術的対応が選手独自に要求され、各人の相対的能力により試合が運ばれるのである。それ故、サッカーでは試合が開始されると主役は選手であり、監督の采配としては試合前の指示、選手の起用法、選手交代など、ごく限られた部分でその能力が評価されることになる。全軍の掌握度に関しては野球に比べると圧倒的に希薄な感じであるが、サッカー監督として重要なことは、試合に至るまでの準備に全エネルギーを注がなければならないことが特徴的である。そして、自分が下した判断が結果として直ちに表れるという責任の重さがあり、野球に比して絶対的に試合数が少ないことが試合ごとの結果が全てと言われる所以である。

最近の監督事情では、プレーヤーの移籍などと同様にサイクルが非常に短く、実質わずか2年タームで判決が下される場合が少なくない。

サッカー監督は、クラブチームと代表チームで求められる能力が異なるのが特徴的であり、クラブチームにおいては選手の特徴をいかにチームに反映させ好結果を獲得できるかが課題であり、代表チームでは時間的制約もさることながら、監督のサッカー哲学を反映させる能力を持った選手を召集し、その浸透により高いチーム力の構築を行う必要があるという異なりがある。

サッカーは、人という高次進化した動物たちが、忘れ去りつつある原始的な行動パターンを回帰させるべく機能を持ち合わせていると言っても過言ではないことについては「サッカー研究（1）」で述べたが、チームの指揮官がチームを率いる際に用いるこれらの行動パターンをコーチングスタイルと呼ぶことができる。「監督のタイプは」という一般的普遍的要素としては分類することができるが、実際には監督は相対的で特殊なものを要求されることが現実である。したがって、サッカーの場合、一般的普遍性と特殊で相対的な両面が存在することが前提にあることを考えなければならない。一般的普遍性要素として、その行動パターンを次のように考えることができる。

① Concept Builder（コンセプトメーク・タイプ）
チームコンセプト（方向性）を明確に決め、トレーニングによって戦術を徹底させるタイプ。

②Frame Worker（フレームワーク・タイプ）
チームコンセプト（方向性）を概略的に決め（Frame Work）、ゲームではプレーヤー自身のスタイル（特徴）を生かすタイプ。これはトレーニングを通じてチームを発展させるタイプというより、個々の選手のベストプレーを重要視するところから、コンディショニングが重要なポイントになる。

③ Coodinator（コーディネーター・タイプ）
チームコンセプトを明確に決めることにはそれほど関与せず、プレーヤーとのコミュニケーションを重要視し、プレーヤーの個性や要求をうまくコーディネイトしてチームを導くタイプでトレーニングはコンディショニングが中心になり、選手の高い能力が必要である。

④ Educator（エデュケーター・タイプ）
トレーニングを主体とし、すべてのチーム行動に規範を設ける。トレーニングの充実によりチームに方向性を生みだし個人の発展に多大なる貢献をするタイプで「先生」「指導者」とも言える。

現実的には監督はチームの試合結果が好ましい状態が目標であるから、求められる能力は、指揮官すなわち監督のゲームマネージメント能力（Game manegimennt ability)、つまり戦略決定、遂行能力がゲームの勝敗を決定づけるということができる。

第4章　日本サッカーの黎明期における独学

第3章においてサッカー監督に関して一般的普遍性条件等について述べたが、この章では具体的に日本代表チーム監督が、我が国のサッカーに如何なる影響を与え現在に至ったかについて述べる。

資料『日本代表チーム全試合記録』に示したとおり、日本が代表チームとして外国チームとの初対戦は、1917年の第3回極東大会（東京）で相手は中国、フィリピンであった。この大会は日本、中国、フィリピンの3国が近隣諸国との対抗戦として開始された大会であり、当時の日本サッカーはアジア地域においても全く初歩段階でフィリピンに2-15と屈辱的な大敗を喫し、1927年の第8回極東大会（上海）でフィリピンに2-1で勝つまで国内はもちろん、海外でも外国チームに対する初勝利を挙げることができなかった。このように1942年までは極東大会が外国チームと対戦できる唯一の機会だった。そして、1936年のオリンピック・ベルリン大会で初のヨーロッパ遠征を経験し、前述のとおり「ベルリンの奇跡」を演じたのである。

日本へのサッカー移入（1873年）以来、日本サッカーは学校（旧制高校、大学）が中心に普及したが、まだ監督というポジションは明確化されておらず、『日本サッカーのあゆみ』にも遠征に際し、選手メンバーと「コーチ」は見られるが「監督」という記述は見当たらない。

第3回極東大会が東京で開催された当時、日本にはまだ代表チームを推薦、決定する統括機関がなく、関西の御影師範と東京の豊島師範、東京高等師範が代表権を争うことになったが、最終的には東京高等師範が代表として出場した。また、当時の日本サッカーの技術は、移入されて以来、キック・アンド・ラッシュ戦法で試合が行われていたものと考えられる。このことはイギリス海軍の副艦長であるダグラス少佐らのサッカーが、『イギリス蹴球協会80年史』(The History of the Football Association, Published for the Football Association by the Naldrett Press, 1953)に1870年頃、本国イギリスで行われていたチーム・フォーメーションが記載されていることからも、その内容が容易に推察できる。また、日本の技術的実状を知る一つの資料として、この極東大会の新聞記事として「コーナーキックを頭で受けて入れる策戦や……云々」や「支那側選手は一体に蹴りがよく頭を使って球を受け、敏捷に動くのに反し、日本側は前衛の守備が悪いためついに敗北した」と記述されている。　日本にとって、まだヘッディングという技術は未経験であったことを窺い知ることができる。さらに、『ボールを蹴って50年』（神戸一中ア式蹴球部編、1966）には「毎日へた張る程の練習をしたが、今から見ると可成り無茶苦茶だった。オフサイドが馬鹿に恐ろしくてフォワードの体形は丁度ラグビーの夫れの如く、ボールを持った者が先に出て他は順次後方に追走して行った。だから両翼はいつも出遅れて、ＬＷ(レフトウイング）の小生の如きは奔走亦奔走に終始した。ＨＢ(ハーフバック）は使命を防御に置き攻撃には力の弱いものであった。ＦＢ（フルバック）は２人共定位置に据わった儘でメッタに動かない」このように、日本サッカーの草創期の技術的幼稚さを述べている。

前述のとおりチョー・ディンによりショート・パス・システムをマスターしていたが、著書『How to play Association Football』（前出）の緒言には「ア式蹴球は日本に於いて未だ相当に認められ居らざるものの如し。各国に於いては非常に一般的なるが故にあらゆる学校、倶楽部に於いて貧富老若を問わず行はる。英仏に於いては婦人さへも行い英仏婦人の試合は毎年行はる。今日の日本の状態は此の方面の著書の少なきに由る。他の競技については相当多くの著書あるにア式蹴球に良書少なきに遺憾とするところなり。故に余は今はフットボールに関する著書を余が14年間の経験により筆を取る。日本の過ごし3年間に於けるプレーヤーの欠点を見、余は著書にできる限り此等の人々の満足する様

に説明したる故に之の著書は諸君の歓迎を受けて諸君の一助たり得るを確信す。」と日本サッカーの成長を願い、また内容は今日行われている基礎技術の全てに通じる解説がおこなわれている。さらに、当時としてはユニークな戦術的な事項の記載も見られ、攻撃に際してのフォワードの位置、防御線、ウィングよりセンターへのパス、スルーパスなどにも触れている。

この草創期におけるサッカーの普及は、チョー・ディンのコーチング以外に大学チームの出現によって外国の技術書による理論的研究が主たる方法であった。

島田晋による『アソシエーション・フットボール』（往来社1931年）の刊行はサッカー理論の研究に大きな影響を与えた。これは、ドイツのオットー・ネルツ(Neltz, O)の著“Fussball”を翻訳、解説を加えたものである。この著書の特徴は優れた戦術論であり、基本的観念としてフライシュテルレン(自由な位置取りをすること：Freistellen)とデッケン(カバーとは：Decken)であり、各大学チームはこのサッカー理論に取り組んだ。

そして、1936年オリンピック・ベルリン大会までにはショート・パスとロング・パスをミックスした我が国独特の巧緻なシステムを確立し、日本サッカーの実力が全世界の水準で試される時でもあった。しかし、オリンピック本大会に望むにあたり、現地における練習試合で、初めてWMシステム（３ＦＢシステム）を経験したのである。

このときの３ＦＢシステムの導入について、後に代表チーム監督を務めた竹腰重丸は著書『サッカー』(旺文社スポーツ・シリーズ1956年）の中で「我が国では1936年にベルリン・オリンピック大会に参加するまでは、この戦法を知らず、またボール扱いの技術が英国ほど高くなく、攻撃力がさほど強くなかったので相当長い間２ＦＢシステムにしたがっていた。もっとも東京の２，３の有力大学チームでは、1932年ごろから、攻撃から防御に転ずればセンター・ハーフは一直線にゴール前に帰ることとし、ウイング・ハーフが敵インナーを外側から内側に圧迫する守備法を採用したが、フルバックがゴール前から外側、すなわちタッチ・ラインのほうに出てウイングを緊密にマークすることはしなかった。オフサイド規則が攻撃側に有利に変更されたので、守備側としてはゴール前を手薄にすることに不安を感じたので、最後の線のフルバックを外に開かせることに考えが及ばず、また、多くのチームで、随一の働き手であるセンター・ハーフを攻撃の第一線からはずすことに未練があったのが一つの理由であった。……日本代表が、ベルリン・オリンピック大会参加のための現地到着後、ベルリンのクラブチームとの練習試合において、彼らが等しく３ＦＢ制で戦うのを見て、ただちにこれを採用したのは当然であり、また、さして困難を感じなかった次第である。」と述べている。

さらに、日本サッカーはベルリンで３バック・システムの導入に止まらず、技術的にも大きな影響を受け、ボールの扱い方の巧みさと戦法、体格と戦法の関連など基本的な事柄について学んだ。1940年に至ると日本近隣諸国には負けることを知らず、初期の日本サッカーは俄に成長を見せた。

第５章　1980年代後半から日本サッカーのプロ化までの日本代表監督

日本で代表チーム監督として、その立場が明確になったのは、戦後第1回アジア大会(1951年）の二宮洋一監督からである。しかし、この当時の監督とは、現在の代表チームの監督とは若干立場が異なる。すなわち、いわゆるチームマネージャー（主務）的な性格を持った立場のように考えられる。

『表』は代表チーム歴代監督の在任期間中における試合、対戦相手国所属地域を表したものであるが、この表および資料より日本サッカーが育成、強化の面から世界的にいかなる国々とAマッチからCマッチに至るまでテストマッチとして行ってきたかについての変遷がわかる。

1960年に日本サッカー協会は、オリンピック東京大会に備え、「選手強化計画の構想」として、①候補選手の育成、②体力強化、③国際試合、④外人コーチの招聘、⑤コーチの留学、⑥科学的研究、⑦普及活動の将来的ビジョンを打ち出し、本格的な強化に取り組んだ。

協会は強化のためヨーロッパ遠征の経験から、初めて外国人コーチとして西ドイツ・サッカー協会の推薦でデットマール・クラマーを招聘した。

クラマーの技術観は「基礎技術のトレーニングを通してこそ精神力、気力が生まれ、戦術が現れてくる」という言葉に尽くされている。ボールを蹴るという初歩的基礎技術については“正確さ”を主眼に、正確なパス・足技が基本であることを徹底させた。また戦術については自由な位置に走り込む、コンビネーション、ドリブルなどと共に防御に関して対人防御、地域防御などについても説いた。

これらの指導内容からも、当時の日本サッカーの未熟さが明確に読みとれるのであるが、クラマーは代表チームのコーチングのみならず、全国を巡回しスポーツ教室を開催したり、基礎技術の全国的普及に務めた。したがって1961年以降の日本のサッカー技術はクラマー方式一色で協会普及部関係テキストの講習内容も全てクラマー方式に準拠した。

また、強化策の一環である国際試合では、ヨーロッパ遠征が中心となり、現地クラブ・チーム（Cマッチ）と数多くの試合を消化して国際経験を積んだ。長沼健監督を指揮官としたオリンピック東京大会では、対戦国によりチームシステムを対応させるなどチームとしての成長を見せ、さらに、国際交流の拡大、コーチ陣容の拡充強化や少年サッカーの育成にも目を向け、中でもコーチの陣容拡大により代表チームの母体を強化、大学、社会人チームの強化に力点をおいた。アジア地域の指導者を対象に第1回FIFAコーチングスクールを日本で開催し、我が国においても初めてコーチという指導専門職が誕生したのである。

さらに、オリンピック東京大会後、日本サッカーの発展・強化のためには同レベルチームの対戦が不可欠であるいうクラマーのアドバイスにより、全国を4地区に分け地区の最強チームによるリーグ戦が1965年から日本サッカーリーグ(Japan Football League:JFL)として発足した。

1968年オリンピック・メキシコ大会の代表チームは、日本サッカーリーグ選手によって構成され、この国内リーグによる技術的向上が証明された。結果的に銅メダル（3位）を獲得したが、その勝因としてコーチの岡野俊一郎（現日本サッカー協会会長）は『サッカー』(日本蹴球協会、1968)の中で「東京大会以降の4年間、代表チームは70試合余りの国際試合を行ってきた。しかも相手は東欧、西欧、南米と世界中のすべてのスタイルを持つチーム、それも一流のチームと戦ってきた。この貴重な経験により、日本選手は試合中において瞬間的に自分のなすべきことを早く判断するように鍛えられた。メキシコに行く前、あるいはメキシコに着後の大会が始まる前に、我々はグループ・リーグで戦う3チームについて、十分な情報を集めていた。相手を知った上でたてた作戦が巧く行かないはずがない。作戦的な意味での勝利は戦う前に、すでに我々の手もとに届けられていたのである。」と述べている。

デットマール・クラマーにより、日本サッカーの進むべき道筋は両オリンピックの結果により明確に示されたが、その後の日本サッカーは、『資料』および『表』に示すとおりアジア地域においても低迷を極め、W杯はもちろんのこと28年後の1996年のオリンピック・アトランタ大会まで陽の目を見ることがなかった。

当時の日本はアマチュアであり、W杯は夢物語でオリンピック大会が唯一の世界大会であった。そのオリンピック本大会に出場できないことは、世界のサッカー界からの孤立化を意味し、世界サッカーの情報さえも得ることができない状態が続いた。

1980年代後半にいたり、世界サッカーからの遅滞的危機感から、我が国でサッカーのプロ化を模索するという世界指向がサッカー関係者の一部に見られ始めた。1965年に発足した日本サッカーリーグにも翳りが見え始め、さらにメディアの拡大化等により世界サッカーの情報が逐一入手可能になり、孤立化現象による危機感が一層募り、その解消の必要性を強く持つに至ったのである。

W杯メキシコ大会、オリンピック・ソウル大会への出場権を逃した1980年代後半は、日本サッカー

が世界に向けて始動し始めた時期で、アマチュアである日本リーグのプロ化への移行期に、世界大会への出場をノルマに代表監督に就任したのが**横山謙三**だった。

「若い世代を早期に国際経験を積ませる」ことをチームコンセプトとしたが、結果的には1992年の日韓戦の敗戦が最後となった。

成績不振による監督交代論が高まる中、リーグのプロ化が現実味を帯びて来た時代に結局、横山監督は「日本人の標準を抜け出していない」という評価で交代を余儀なくされた。

この頃になるとサッカー協会内部（強化委員会）では、外国人監督登用の必要性に大きく傾斜していった。1988年のオリンピック大会からプロ解禁となり、さらに、1992年バルセロナ大会から参加資格が23歳以下という年齢制限が加えられてオリンピック・チームを編成することになった。（資料、表中には1988年以降はオリンピックチームは代表チームとして扱っていない）

1991年にいたり日本プロリーグ参加の10チームの代表団による欧州視察が行われ、プロ化が現実となり、コーチに清雲栄純、監督**ハンス・オフト**（オランダ）が誕生した。オフトはオランダ・サッカー協会ユース部門コーチであり、育成レベルでは高い評価を得ていた。さらに幸いなことにそれまでにヤマハ（現ジュビロ磐田）、マツダ（現広島サンフレッチェ）で5年近くを日本で過ごし、日本事情に精通していたことであった。この時点で重要なことは、日本サッカー協会がプロの監督を雇用した事であり、監督がプロであることにより、選手にもこれまでのような甘えなどは一切許される筈がないという環境が従来と大きく変化したことだった。

外国人プロ監督に交代するや、それまでの日本サッカーの環境が大幅に改革され、勝利ボーナス、代表選手の所属するチームに対する「選手派遣費」が初めて支払われるようになった。従来、アマチュア組織として機能していた日本サッカー協会は、協会の改革のはしりとして、プロ監督の対応にエネルギーを注がねばならなかったが、それは当然のことで、将来の方向性を見据えた改革となった。

オフトのコーチングは、チームに必要な規律（ディシプリン）を、ピッチ内ではもちろんのこと外でも求めた。「一人一人が役割をこなすことで組織力を高める。……タスクサッカーだった。そのためにはチームとしての定められた規律がなければならない。」それまでの日本サッカーにはチーム内に約束事を設けて戦うという風潮はほとんど見られなかった。こうした面でオフトの日本サッカーに残した足跡は非常に大きいと言える。

アマチュアからプロへの移行期とはいえ、体系的、実戦的な指導法が確立され、日本にとっては今までにないキメ細かな指導が程良くマッチしたとも言える。日本のレベルにまで自分を引き下げ、理解させるというよりむしろ、日本のレベルを把握した上で、意図的に指導内容のレベルを下げて指導したと言うことができる。

チーム作りの特徴として、「コンパクト」「トライアングル」「スリーライン」「アイコンタクト」「ディシプリン」などのキーワードを導入し、基本戦術を選手に刷り込むようにしたことである。一時は「オフト・マジック」というサッカー界では流行語にもなった。監督就任後１年でW杯アジア地区一次予選（1993.4)が行われたが、オフトは就任以来バックアップチーム（Ｂチーム）の必要性を説いてきた。しかし、それができず現実的な選択を迫られ、結果的には1993年10月のアジア地区最終予選の対イラク戦でロスタイムに同点にされ、勝ち点で韓国と並びながらも得失点差で3位となり初のW杯出場の機会を逃してしまったのである。（ドーハの悲劇）しかし、このドーハでの敗戦があってこそ日本にサッカーの根付きが見られ始めたとも言える。同年5月には待望の日本プロサッカーリーグ（Ｊリーグ）が華やかにスタートした時期でもあった。

オフトの通算成績はAマッチ以外も含めて19勝9敗10分けであるが、その成績以上に日本サッカーに与えた影響は大きく、短期間に現代サッカーの戦術を代表チームにもたらし、チームレベルを引き上げた手腕や日本と日本人の持ち味を生かしたチームつくりの方向性と日本のスタイルを確立した意

味でもオフト・ジャパンは間違いなく大きな礎となったことは間違いない。

ポスト・オフトを巡っては日本サッカー協会内でも強化体制は一枚岩ではなかった。W杯に出場した経験も持たず、外国サッカー協会との情報ルートすら把握できていない時点で、世界のサッカーに通じ、経験則を持ち合わせた著名な監督など望むべくもなかった。

結果的には、1998年W杯フランス大会までに複数監督を試し、その中から絞り込もうとする程度の強化プランしか持ち合わせていなかった。この時点では、まだ将来的な日本サッカーのビジョンが協会側にも見えていなかったと言わざるを得ない。

1990年代の世界サッカーの潮流はオフトが持ち込んだプレッシング・サッカーを発展させ、強力なサイドプレーヤーを擁したスピーディなスタイルに向かっていた。チームの組織力を破る個のスピード、判断の速さなどが求められる時代に入りつつあった。

そんな時にポスト・オフトとして元ブラジル監督の**パウロ・ロベルト・ファルカン**が就任したが、選手の力量を把握できなかったか、あるいは日本サッカーを過大評価したか、いずれにしてもファルカン自身の指導力が評価の対象にもならないまま、1994年10月アジア大会を最後に日本を去った。

第6章　W杯フランス大会と2002年を目標に

僅か8ケ月の代表監督の任で日本サッカー協会は、ファルカンに何を求めたのか、日本サッカーがアジアでどれほどの力量があると考えたのか、協会の実情把握に誤りがあったのではないかと思わせるほど理解に苦しむ監督の起用だった。

日本サッカー協会は、ポストファルカンで「国際舞台で修羅場を経験した外国人指導者」を前提に次期監督を模索すべきだったが、ファルカンの際の「コミュニケーション不足」を理由に、日本人監督の起用となった。言語的なコミュニケーション不足を指摘するならば、諸外国のビッグクラブでは外国人選手を多数抱えているし、また外国と言えども監督が自国監督とは限らない。この辺りの事情は日本のサッカー的思考形態の未熟さを感じざるを得ない。日本サッカー協会が外国人指導者に対するリサーチルートを持ち合わせていなかったことにより、日本人監督の雇用という協会には一番楽な選択になったものと考えられる。

日本サッカー協会の代表監督の起用に関しては、オフト以前は代表選手の経験、主将を務めた経験を持つ人を日本サッカーリーグ・チームから順次選出していたような慣習的なものがあったことや、協会側のアマチュア志向を代表監督経験(1986.5～1987.10)のある石井義信は語っている。(Soccer Magazine 2002.vol3.2001)

加茂周監督との契約は当初1年としたが、加茂自身は1998年W杯フランス大会を想定し、長期計画を持っていたことは代表選手の選考からも推察できる。「ゾーンプレス」をキャッチフレーズとし、選手のモチベーションを高め、キリンカップ、国際チャレンジ大会（イングランド）などで成果を上げ、チームとして攻守に一体感が生まれ始めチームとしての形を整えつつあった。

そうした時期に契約更改で続投か、交代か監督のポスト巡って協会の内部事情と絡み、複雑な事態が生じた。更改時点で強化委員会は、加茂監督に対して「最初にゾーンプレスと言う戦術を揚げて、システムに選手をはめ込む方法は、少なからず限界を感じ、人材不足である日本サッカーでは、むしろ人材に合わせてシステムや布陣を組む柔軟な方法が適当」と監督に対する評価を結論づけた。しかし、日本サッカー協会の最高決議機関が理事会とされていながら、実際には幹部会なる組織が存在し、その幹部会は加茂続投と強化委員会の評価を覆した。この一連の動きの中で冷静な観察を試みるならば、幾つかの問題点が浮かび上がる。すなわち雇用する監督はプロでありながら、これを雇用する側は、従来のアマチュア団体組織そのものの体質であること、とりわけ理事会が最高決議機関であると言いながら、組織図にも示されていない幹部会なる組織により結論を覆すことができるような全体像

などが上げられる。全てのスポーツが国際化しつつある状況で、この実態は世界的レベルでは全く通用しないことが、この時点で日本サッカー協会内部で理解されていなかったと言うことができ、続投を決定する段階で多くの問題を残したことは間違いない。そして、最大の問題は相変わらず強化委員会の権限を曖昧にしてしまったことである。

加茂サッカーに悲観論を生じさせたのは、1996年の第11回アジアカップだった。ゾーンプレスを研究し尽くした相手には全く戦術が通用しないばかりか、状況に応じた戦い方ができないことだった。

強化委員会ではアジアカップの戦い振り、さらに、W杯一次予選オマーンラウンドを通じて、深く引いた相手に有効な攻撃を見せられなかったことに加茂采配に不信感を募らせた。さらに、1997年9月の地区最終予選で「ゾーンプレス」という単純化された戦術に固執したことで選手は少なからず不安持った。結果的に、W杯最終予選中に加茂監督は成績不振という理由で更迭され、**岡田武史**コーチの昇格で急場をしのいだ。この時は未だW杯出場の可能性は数字上で残されていたことで、監督経験のない岡田は試合地において突然の交代であったが、熱い闘争心と冷静さでチームのバランスを保つことに勤めた。

新監督としての岡田監督の武器は、コーチ就任以来アジア各国の状況を徹底的にマークし情報的に豊富なことだった。アジア地区最終予選第３決定戦において、延長戦でイランに対しＶゴール勝ち、きわどい勝利で念願のW杯への切符を手にした。

W杯出場というアジアでトップレベルに昇り詰めたことにより、新たな宿命を背負うことになった。岡田監督は本大会までに、日本サッカーのアジア仕様と世界仕様の使い分けの選択に迫られた。すなわちアジアレベルの試合では、素直に日本の実力を発揮すれば無様な試合にはならないと確信し、相手が守備固めをしたり、日本の持ち味を隠したりする試合運びをテストすることができた。しかし、世界のレベル、欧州、南米のトップチームとの対戦では、失点のリスクを押さえる試合運びが現実的な選択になることは十分承知していた。

日本の持つ組織的な攻撃、パスワーク、敏捷性などは生かしたいし、この出し入れの微妙な加減、戦術的な柔軟さや成熟度の高さが求められたのであるが、監督としては任された時間から現実路線を選択せざるを得なかった。身体能力に限らず、技術や判断力などあらゆる面での個人能力の差を、グループ戦術を限りなく高めることで埋め合わせて対抗しようとした。この時点で岡田監督は真っ向からの勝負を挑むには、まだ20～30年の時間が必要だと感じていた。

W杯本大会における成績は、ドーハの悲劇を経験して４年後のフランス大会で初出場で、予選リーグ３戦３敗に終わったが、日本が念願としていたサッカーの世界最高位の大会で、世界の強国が本気で戦う初めての舞台で３戦経験したことの重要性を、日本サッカーの何が通用し、何が不可能だったかを確認できたことが、次のステップへの経験蓄積として大きな財産になったことは確かである。予選リーグ敗退であったが、日本サッカーは俄に注目の的になった。それに対し日本サッカー協会技術委員会の対応はこれまでにない速さで対応した。

日本サッカー協会では、豊富な経験と国際レベルの実績を持ち、さらに日本サッカーに精通していると言う点で、Ｊリーグ元名古屋グランパスエイトを指揮したアーセン・ベンゲル（フランス）に次期監督の就任要請をしたが、ベンゲルは当時イングランド・プレミヤ・リーグのアーセナル・クラブで指揮とり、育成システムや施設などクラブ運営上重要な役割を担っていた。そこで、ベンゲルの推薦という折り紙つきで紹介されたのが**フィリップ・トルシエ**（フランス）であった。

「ベンゲルありき」が発端となり、協会としては2002年W杯韓国・日本大会までのつなぎとしての選択があったように考えられる。

岡田前監督の言にも20年、30年後と言うとおり、またフランス大会の反省から長期的ビジョンによる強化の必要性を謳いながらも、当面、2年ほどトルシエに任せ、後の2年をベンゲルでと軽薄な思惑

が見られ、依然として協会の日本サッカーを預かる当事者意識を感じ取ることはできなかった。

もちろん、就任要請当時フィリップ・トルシエに関するリサーチはなされておらす、いかなるサッカー志向で、過去、どのようなチームを作ってきたかも全く把握できていなかった。

トルシエはW杯フランス大会ではアフリカ予選でナイジェリアを指揮し、出場権を獲得しながら南アフリカ監督として出場した。したがって、国際的という実績では説得力もあり、アフリカが主体的活動場だったと言えども、国際的にも豊富な経験を持つトルシエに、日本サッカー協会自体も鍛えて貰うのも一つの改革になると考えるほど未だ、世界的には遅れていたと言える。

トルシエ監督の特徴は、サッカー哲学とも言える根拠に基づいた自己主張が強く、日本サッカー界に二面性を強調し続けた点に特徴がある。すなわち、従来、代表監督が協会への不満などを表明しないがよしとしていたが、トルシエの場合は、代表チームにとって何が必要なのか、代表チームに関する判断の全ては自分にあると主張したことや、協会に対して強化日程や選手選考を巡って協会の態度を批判したことは、日本サッカー協会にとっても今までにない大きな刺激をもたらしたと言える。

特にフィールド上では絶対的な権限を持ち、フラット３と言われるトルシエのサッカー哲学に基づいた理論構成により、選手を自分のシステムに合わせさせるという方法を採った。

もっともサッカーには完璧なシステムなど存在するわけではなく、自由で柔軟な発想こそが武器となる競技特性からいって、採用システムにより監督の力量を推し量ること自体余り意味のないことであるのは言うまでもない。実際の試合になれば、監督の思惑を逸脱して、選手が自己表現をしなければならない場面の連続であるのがサッカーの特徴である。トルシエの提唱したフラット３の欠点としてよく言われる両サイドにできるオープンスペースは、選手が試合中に柔軟に対応できる種類のものであるというのがトルシエの主張である。また、トルシエが非常に恵まれていたのは、20歳以下の世界ユース選手権大会、23歳以下のオリンピック・シドニー大会予選および本大会で、若い２チームを直接指揮したことにより、若い世代が高い技術と潜在能力を持っていることを知り得たことだった。ユース選手権大会の準優勝、オリンピック予選突破という実績は、これらの選手に経験を積ませることにより、代表チームの底上げが可能になり、結果的にＡ代表の世代交代に非常に大いに拍車をかけたことになる。

トルシエの2000年はアジアカップ予選を順調にクリアしたが、去就（解任、続投）に関する話題は絶えることがなかった。協会内部の技術委員会に新設された2002年強化推進本部なる組織ではトルシエの限界説が度々出現した。

トルシエの言い分として、自分をサポートしてくれるはずの人間が協会内にはおらず、相談を持ちかけても誰が決定権を持っているのかもわからない。同じプロフェッショナルとして本音で話ができない。協会内部の指揮系統は全く統一されておらず、意志決定機関はどこなのか、トルシエは常にたらい回しにされるような感覚で協会の組織機能に疑問を持った。

2000年4月の韓国戦に1-0の敗戦後、トルシエの解任は決定的になったが、後任が見あたらず監督人事だけが先行することになった。しかし、この時点でも協会はトルシエに確かな評価を与えることができなかった。

この時期、日本サッカー協会は長期的展望にたち、将来的ビジョンとしての基本理念をどこかに放棄し、目先の代表試合の結果のみに固執し、これを評価の対象としたことは間違いない。

しかし、結果論的にはオリンピック・シドニー大会でメキシコ大会以来32年振りにベスト８進出、アジアカップでは質の高いサッカーで優勝、12月の対韓国戦は1-1と2000年の最終戦をドローに終わり、とにかくトルシエ・ジャパンが将来的な可能性を示したことは確かである。

このアジアカップの優勝は、それまでの日本代表のイメージを遙かに超え、その急成長振りは、非常に質の高い今までに見られなかったサッカーに示された。アジアのレベルではあるが、得点力不足

と言われた攻撃面では非常に改善されていた。特に、一つのボールの動きに対する選手の先取りした動き、次々と反応するオートマティズムは眼を見張るものがあった。少ないボールタッチで相手を攻め崩し流れるようなパス交換からの攻撃は、トルシエが2年以上の時間を要して作り上げてきたものだった。トルシエは国際試合と言えども、また、選手の起用法などを批判されようが、2002年W杯に向けてのテストと言う表現を使ってチームを作り上げてきた。このアジアカップ優勝がこの時点でトルシエサッカーの結論だったと言える。

さらに、トルシエ自身が極東の地において指導者として成長していることも確かである。
それは、アジアカップ決勝時に、「日本人の自己表現力不足」について「そうゆう日本人のメンタリティが武器になるかもしれない」と述べている。

トルシエには、それまで選手達の気持ちの高ぶりを表面化しない、組織の一員としての静かな振る舞いが、マイナス要素として映っていた。しかし、アジアの頂点を前にしながらの冷静さや、まとまりの良さを日本人独特の表現法としたチームの持ち味を認めている。オリンピック、アジアカップの戦いを通じて「人間性」がチーム作りに大きな要素であることを強調し始めた。

サッカーの監督は野球と異なり、試合が始まってしまえば監督にできることは限られている。ベンチからの指示は観客の騒音や、また興奮した選手の心理状態もあって伝わらない。実質的にはハーフタイムの15分における指示と、選手交代であり、いわゆる采配という言葉で表現できる部分はこの2つに限られる。

選手交代により好結果を得ることができれば、好采配と評価され、失敗すれば采配ミスとして評価される。しかし、限られた試合中の采配より重要なのは、試合を迎えるまでにどのようなチーム作りをしたか、選手をピッチに送り出すまでに如何に練り上げられているかが勝負になると強調している。日本では、試合中の采配ばかりが注目されがちであるが、対戦相手の情報を集め、試合を想定してゲームプランを練り、どのような練習を積んで、最終的にどんな先発メンバーを組むのか。予想外の展開に慌ててハーフタイムに指示を出し、選手交代のカードを切るよりも、そこまでの準備の方が非常に重要な采配と言うことができるのである。

第7章　まとめ

日本代表チームに監督という制度が採用されたのは、戦後、1951年二宮洋一監督が初代ということになるが、2001年10月までの50年間に21回の交代と延べ18人の監督が代表チームの指揮をとっている。1950年代は日本サッカーの実力もさほど顕著な成果も見られないまま、戦前からのサッカーを踏襲したわけで、アジア大会を中心にムルディカ大会などアジア地域諸国との対戦が多く見られた。しかし、1960年代にオリンピック対策として、西ドイツからデトマール・クラマーを招聘したことにより、俄に日本サッカーの成長の兆しが見られ、1968年メキシコ大会では3位の成績を残した。この時は代表チーム監督として長沼健が指揮をとり、「監督」の存在がチームにとって重要視されるようになったとともに、一時的ではあったが、それまでマイナーであったサッカーに大きくスポットが当たった瞬間でもあった。当時の日本サッカーはアマチュア全盛時代であり、最大の目標がオリンピック大会であったが、結果的には、何度かのW杯予選にチャレンジはしたものの、1996年アトランタ大会までオリンピック大会にさえ出場することができなかった。

日本サッカーがアマチュアだった間は、日本サッカーリーグ所属チームから、日本代表経験者などにより順次代表監督が引き継がれてきた。しかし、1985年には代表チームの強化には監督のプロ化が必要であることを森孝慈が協会に進言しているが、結局実現せずプロ監督の採用はハンス・オフトまで待たねばならなかった。

代表チームはその国のサッカーのショウウインドウと言われ、その国のサッカー文化の集大成でも

ある。日本と言う国が長い時間をかけて、サッカーに情熱を捧げる無数の人々が育み熟成させて日本のサッカーを作り上げてきたのである。しかし、残念ながらサッカー先進国に比べると、いかにも日本サッカーの歴史は浅い。過去のオリンピック・ベルリン、メキシコ両大会での活躍を根拠に日本サッカーのアイデンティティを主張するが、これは一過性のもので、これによりサッカーが国民的な民衆文化として根付いたわけではない。むしろ日本に本当にサッカー文化が根付き始めたのは1993年Ｊリーグが開始されてからであろう。欧州や南米の国々が50年、100年の年月をかけてサッカー文化を築き上げて来たのに対し、日本ではサッカーが本当に身近な存在となって、まだ10年にも満たない。

このような観点から日本サッカーを傍観すると、1980年代後半から漸く日本もサッカーを世界的レベルで捉えるようになったのではないかと考えることができる。すなわち、ハンス・オフト、フィリップ・トルシエには国際経験は言うまでもなく、サッカー哲学、コンセプトを明確に持ち代表チームの監督を務めた。こうしたことは、それまでの監督には見ることができず、極端に言えば日本サッカーに革命をもたらしたとも言える。

日本人は往々にして過去の名声などに盲目的であったり、メディア情報による外国人指導者の崇拝主義などにとらわれやすい傾向があるが、監督にもTPO（Time時、Place場所、Occasion状況）があると言える。すなわち日本サッカーがどのような監督を求めているのか、選手を育てるのか、長いスパンで仕事をさせるのか、短期で結果を求めるのかを明確にすることが大前提で、その上、指導者の素質・能力が「ずれたタイミング」「ずれた場所」「ずれた状況」に至らないような詳細なリサーチが必要であろう。

また、監督に絶対的要求を突きつけ、監督という職業を絶対的な位置へと引き上げるような人選の方法は避けるべきで、サッカー監督は、野球と異なり、相対的で絶対的などあり得ない側面と一般的で普遍的な両面が存在することを認識する必要がある。

日本サッカーは、まだ世界と同等に肩を並べられる状況ではないと考えられることから、トルシエのごとく、チームあるいはその国サッカーを育成するタイプの指導者が、現時点では必要であろう。

ハンス・オフト、ロベルト・ファルカン、フィリップ・トルシエと３人の外国人プロ監督は、それぞれが監督として日本サッカーに多大な影響を与え、特にトルシエは外国人として日本代表チーム監督の最長記録を作ったと言うだけではなく、戦前のチョー・ディンや1960年代のデトマール・クラマーとならび、サッカーの質のみならず日本サッカーの組織に至るまで、日本サッカー史を完全に塗り替える大きな足跡を残した指導者と言うことができる。

参考・引用文献

セルジオ・越後『日本サッカー勝つための準備』　講談社　2000.
日本蹴球協会編『日本サッカーのあゆみ』講談社　1974.
ベースボール・マガジン社　『激動の昭和スポーツ史』（サッカー編）　1989.
日本サッカー協会75年史編集委員会『日本サッカー協会７５年史』1996.
岸野雄三・多和健雄編『スポーツの技術史』大修館書店　1972.
新田純興・福島玄一・多和健雄・村岡博人『図説 サッカー事典』講談社　1971.
アレックス・ファーガソン著、東本貢司訳『監督の日記』日本放送出版協会　1998.
スチュアート・バクスター『勝つための組織力』講談社　1996.
ハンス・オフト『日本サッカーの挑戦』講談社　1993.
ドゥンガ『勝者の条件』経済界　1998.
アーセン・ベンゲル『勝者のヴィジョン』日本放送出版協会　1999.
アーセン・ベンゲル『勝者のエスプリ』日本放送出版協会　1997.
湯浅健二『サッカー監督という仕事』新潮社　2000.

ジェフ・キング著 竹澤哲訳『監督の条件』日刊スポーツ出版社　2001.
後藤健生『トルシエとその時代』双葉社　2000.
フィリップ・トルシエ著 田村修一訳『トルシエ革命』新潮社　2001.
加納哲也『サッカー研究(1) サッカーの世界制覇とその要因』神戸大学発達科学部紀要　Vol.8-1
加納哲也『サッカー研究(2) アジア地域における日本サッカーの評価』 神戸大学発達科学部紀要　Vol.8-2.
加納哲也『サッカー研究(3) 日本と韓国の関係』神戸大学発達科学部紀要　Vol.9-2
竹腰重丸『サッカー』旺文社　1956.
日本蹴球協会編『サッカー』日本蹴球協会機関誌　1968.

雑誌
『サッカー批評　08』「監督たちへの視座」　2000.10.
『日本代表 SPIRITS』「トルシエが変えたもの」Vol.7　2001.8
『サッカーマガジン2002』「指揮官とその時代」Vol.2　2002.4.
『Nummber　PLUS 1』「指揮者と収穫の10年」 2001.6.

表:歴代代表監督の試合数および対戦相手国所属地域一覧

表示の仕方

・対戦相手チーム所属地域については次に示すとおりである。

AFC:アジア地域連盟　　UEFA:ヨーロッパサッカー連盟

CONMBO:南米サッカー連盟　　CAF:アフリカサッカー連盟

CONCACAF:中北米カリブ海サッカー連盟　　OFC:アジア・オセアニアサッカー連盟

・成績欄は　勝ち－負け－分け　の順で表示した。

・監督の在任期間は、監督就任初戦の年月から最終戦までの年月とした。

監督名	ランク別			対戦相手チーム所属地域					
就任期間		試合数	成績	AFC	UEFA	CONMEBO	CAF	CONCACAF	OFC
二宮洋一	A	3	1- 1- 1	3					
	B								
1951.02～	C		6- 0- 0	6					
1951.03		9	7- 1- 1	9					
竹腰重丸	A	9	2- 5- 2	8					1
	B	2	0- 2- 0		1			1	
1951.11～	C		6- 5- 2	7	5				1
1956.11		24	8-12- 4	15	6			1	2
高橋英辰	A								
	B								
1967.10～	C	7	2- 4- 1	7					
1957.11		7	2- 4- 1	7					
川本泰三	A	2	0- 2- 0	2					
	B								
1958.05	C								
		2	0- 2- 0	2					
竹腰重丸	A	11	4- 5- 2	11					
	B								
1958.12～	C	10	1- 5- 4	10					
1959.12		21	5-10- 6	21					
高橋英辰	A	15	3-10- 2	14	1				
	B	1	0- 1- 0		1				
1960.08～	C	23	3-18- 2	2	20	1			
1962.09		39	6-29- 4	16	22	1			
長沼　健	A	31	18- 6- 7	24			2		5
	B	24	5-14- 5	1	17	4	2		
1962.12～	C	96	30-52-14	12	75	7	2		
1969.10		151	53-72-26	37	92	11	6		5
岡野俊一郎	A	18	11- 5- 2	17	1				
	B	2	1- 1- 0	1	1				
1970.03～	C	29	4-21- 4	1	26	1			1
1971.10		49	16-27- 6	19	28	1			1
長沼　健	A	42	16-21- 5	38	4				
	B	10	6- 3- 1	4	3			3	
1972.01～	C	40	7-24- 9	1	33	6			
1976.04		92	29-48-15	43	40	6		3	
二宮　寛	A	27	6-15- 6	24	3				
	B								
1976.05～	C	44	13-25- 6	2	39	2		1	
1978.12		71	19-40-12	26	42	2		1	
下村幸夫	A	14	8- 2- 4	14					
	B	2	0- 1- 1	2					
1979.03～	C	15	0- 9- 6	2	12			1	
1980.04		31	8-12-11	18	12			1	
	A	172	69-72-31	155	9		2		6
1951～1980	B	41	12-22- 7	8	23	4	2	4	
試合数	C	283	72-163-48	50	210	17	2	2	2
		496	153-257-86	213	242	21	6	6	8

サッカー研究（4）日本代表監督に関する一考察

監督名	ランク別			対戦相手チーム所属地域					
		試合数	成績	AFC	UEFA	CONMEBO	CAF	CONCACAF	OFC
渡辺　正	A	3	2- 1- 0	3					
	B								
1980.05～	C	5	1- 3- 1	1	3	1			
1980.06		8	3- 4- 1	4	3	1			
川淵三郎	A	10	3- 5- 2	10					
	B	5	0- 4- 1	1	4				
1980.11～	C	5	2- 2- 1	3				2	
1981.03		20	5-11- 4	14	4			2	
森　孝慈	A	43	22-16- 5	38	2	1			2
	B	4	1- 1- 2	1			2		1
1981.05～	C	58	17-25-16	10	39	9			
1987.11		105	40-42-23	49	41	10	2		3
石井義信	A	17	11- 4- 2	16			1		
	B	2	2- 0- 0	1	1				
1986.05～	C	21	6- 8- 7	9	9	3			
1987.10		40	19-12- 9	26	10	3	1		
横山謙三	A	23	5-12- 6	22		1			
	B	8	0- 5- 3	5	2	1			
1988.01～	C	35	9-18- 8	5	20	10			
1991.07		66	14-35- 8	32	22	12			
オフト	A	27	17- 4- 6	22	2	1	1	1	
	B								
1992.05～	C	11	2- 5- 4		11				
1993.10		38	19- 9-10	22	13	1	1	1	
ファルカン	A	9	3- 2- 4	4	1		2		2
	B								
1994.05～	C								
1994.10		9	3- 2- 4	4	1		2		2
加茂　周	A	48	25-14- 9	24	10	7	2	2	3
	B	1	1- 0- 0	1					
1995.01～	C	1	0- 0- 1	1					
1997.10		50	26-14-10	26	10	7	2	2	3
岡田武史	A	16	5- 7- 4	8	3	2		2	1
	B	1	1- 0- 0	1					
1997.10～	C								
1998.06		17	6- 7- 4	9	3	2		2	1
トルシエ	A	34	17- 9- 8	13	7	8	2	3	1
	B	1	1- 0- 0	1					
1998.10～	C	2	1- 0- 1	1	1				
		37	19- 9- 9	15	8	8	2	3	1
1980～ 試合数	A	230	110-74- 46	160	25	20	8	8	9
	B	22	6-10- 6	11	7	1	2		1
	C	138	38-61- 39	30	83	23		2	
		390	154-145-91	201	115	44	10	10	10

1951～現在 総試合数	A	402	179-146-77	315	34	20	10	8	15
	B	63	18- 32-13	19	30	5	4	4	1
	C	421	110-224-87	80	293	40	2	4	2
		886	307-402-177	357	414	65	16	16	18

資料：日本代表チーム全試合記録（1917.5.9以降）

表中：類においてA,B,CはFIFA(国際サッカー連盟）の対戦相手に関わる規定に基づく、Aマッチ、Bマッチ、Cマッチを表す。
Aは国代表チーム、Bは国等の選抜や五輪代表チーム、Cはクラブチームを表す。
注1：川本泰三監督が2試合のみ監督務めた

監督	試合年月日	類	勝敗	得点	対戦相手	試合地	大会・試合名等
	1917/05/09		●	0-5	中華民国	東京芝浦	第３回極東大会
	1917/05/10		●	2-15	フィリピン	東京芝浦	
	1921/05/30		●	1-3	フィリピン	上海	第５回極東大会
	1921/06/01		●	0-4	中華民国	上海	
	1923/05/23		●	1-2	フィリピン	大阪	第６回極東大会
	1923/05/24		●	1-5	中華民国	大阪	
	1925/05/17		●	0-4	フィリピン	マニラ	第７回極東大会
	1925/05/24		●	0-2	中華民国	マニラ	
	1927/08/27		●	1-5	中華民国	上海	第８回極東大会
	1927/08/29		○	2-1	フィリピン	上海	
	1930/05/25		○	7-2	フィリピン	神宮（現・国立競技場）	第９回極東大会
	1930/05/29		△	3-3	中華民国	神宮	
	1934/05/13		●	1-7	オランダ領インド	マニラ	第10回極東大会
	1934/05/15		○	4-3	フィリピン	マニラ	
	1934/05/17		●	3-4	中華民国	マニラ	
	1936/07/14		●	1-3	バッカーセン(独)	ベルリン	
	1936/07/27		●	3-4	ミネルバ(独)	ベルリン	
	1936/ 不明		●	2-3	フラウワイス(独)	ベルリン	
	1936/08/04		○	3-2	スウェーデン	ベルリン	オリンピック・ベルリン大会
	1936/08/07		●	0-8	イタリア	ベルリン	
	1939/08/27		○	6-1	関東州	大連	日満大連交歓大会
	1939/09/02		○	3-0	中華民国	新京	日満華交歓大会
	1939/09/03		○	6-0	満州	新京	
	1940/06/07		○	7-0	満州	神宮	東亜大会
	1940/06/09		○	6-0	中華民国	神宮	
	1940/06/15		○	1-0	フィリピン	甲子園南	
	1942/08/06		○	6-1	中華民国	新京	
	1942/08/09		○	3-0	満州	新京	
	1942/08/10		○	12-0	蒙古	新京	
二宮洋一監督	1951/02/11		○	5-4	全関西	大阪球場	
	1951/02/18		○	9-0	全関学	西宮球場	
	1951/03/01		○	5-0	政府印刷局クラブ（インド）	ニューデリー	
	1951/03/03		○	2-0	インド空軍（インド）	ニューデリー	
	1951/03/07		△	0-0	イラン（延長）	ニューデリー	第１回アジア大会（ニューデリー）
	1951/03/08		●	2-3	イラン	ニューデリー	
	1951/03/09		○	2-0	アフガニスタン	ニューデリー	
	1951/03/不明		○	3-1	インド実業団	ニューデリー	
	1951/03/不明		○	5-1	アサンプジョン大学	バンコク	
竹腰重丸監督	1951/11/25		●	0-3	ヘルシングボリ（スウェーデン）	西宮球場	
	1951/12/02		●	0-5	ヘルシングボリ（スウェーデン）	神宮	
	1952/06/08		○	4-3	全香港華人選抜	神宮	
	1952/06/14		○	0-9	オッフェンバッハ（独）	神宮	
	1953/11/22		●	1-5	ユールゴルデン（スウェーデン）	難波球場	
	1953/11/29		●	1-9	ユールゴルデン（スウェーデン）	神宮	
	1954/03/07	A	●	1-5	韓国	神宮	W-CUP '54スイス大会
	1954/03/14	A	△	2-2	韓国	神宮	第13グループ予選
	1954/05/01	A	●	3-5	インドネシア	マニラ	第２回アジア大会（マニラ）
	1954/05/03	A	●	2-3	インド	マニラ	
	1955/01/02	C	△	1-1	保健大臣チーム（ビルマ）	ラングーン	
	1955/01/05	C	●	0-3	体育会長チーム（ビルマ）	ラングーン	
	1955/01/08	C	△	1-1	アマチュア協会選抜（ビルマ）	ラングーン	
	1955/01/11	A	○	1-0	ビルマ（体協選抜）	ラングーン	
	1955/01/13	C	○	3-2	北ビルマ	マンダレー	
	1955/01/18	C	○	3-1	在タイ全華人	バンコク	
	1955/01/19	C	○	5-1	全バンコク	バンコク	
	1955/10/09	A	△	0-0	ビルマ	東京・後楽園	
	1956/06/03	A	○	2-0	韓国	東京・後楽園	オリンピック・メルボルン大会予選
	1956/06/10	A	●	0-2	韓国（延長）	東京・後楽園	
	1956/10/25	B	●	3-5	米国アマ代表	東京・後楽園	
	1956/11/17	C	○	3-0	ハコア・クラブ（豪州）	メルボルン	
	1956/11/20	B	●	2-7	ユーゴスラビア五輪代表	メルボルン	

	1956/11/27	A	●	0-2	豪州	メルボルン	オリンピック・メルボルン大会
高橋英辰監督	1957/10/20	C	●	0-2	八一隊（中国）	北京	
	1957/10/23	C	●	1-2	北京市代表（中国）	北京	
	1957/10/27	C	●	2-3	瀋陽市代表（中国）	瀋陽	
	1957/10/29	C	●	2-3	全国第一機械体協隊（中国）	瀋陽	
	1957/11/03	C	△	1-1	上海市代表（中国）	上海	
	1957/11/05	C	○	2-1	紅旗体協隊（中国）	上海	
	1957/11/10	C	○	3-2	広州市代表（中国）	広州	
注1	1958/05/26	A	●	0-1	フィリピン	東京蹴球場	第３回アジア大会（東京）
	1958/05/28	A	●	0-2	香港	国立競技場	
竹腰重丸監督	1958/12/25	C	●	2-5	香港選抜	香港	
	1958/12/27	C	●	0-2	南マラヤ選抜（マラヤ）	クアラルンプール	
	1958/12/28	A	●	2-6	マラヤ	クアラルンプール	
	1958/12/31	C	○	3-0	ペラク州選抜（マラヤ）	イポー	
	1959/01/03	C	△	2-2	ペナン州選抜（マラヤ）	ペナン	
	1959/01/04	A	○	3-1	マラヤ	ペナン	
	1959/01/07	C	●	1-2	マラヤンマラヤ（マラヤ）	クアラルンプール	
	1959/01/08	C	△	2-2	セランゴール州選抜(マラヤ)	クアラルンプール	
	1959/01/10	A	○	4-3	シンガポール	シンガポール	
	1959/01/11	A	●	2-3	シンガポール	シンガポール	
	1959/01/14	C	△	1-1	香港選抜	香港	
	1959/08/31	A	△	1-1	香港（延長）	クアラルンプール	第３回ムルディカ大会
	1959/09/02	A	●	2-4	香港	クアラルンプール	
	1959/09/03	A	○	4-1	シンガポール	クアラルンプール	
	1959/09/05	A	△	0-0	韓国	クアラルンプール	
	1959/09/06	A	●	1-3	韓国	クアラルンプール	
	1959/09/09	C	△	2-2	ペラク州選抜（マラヤ）	イポー	
	1959/09/13	C	●	1-3	ベトナム陸軍（ベトナム）	サイゴン	
	1959/09/15	C	●	1-2	サイゴン選抜（ベトナム）	サイゴン	
	1959/12/13	A	●	0-2	韓国	後楽園	オリンピック・ローマ大会
	1959/12/20	A	○	1-0	韓国	後楽園	アジア予選
高橋英辰監督	1960/08/23	C	●	0-5	アルメニア・アーヘン（西独）	アーヘン	
	1960/08/25	C	●	1-4	グラスホッパー（スイス）	チューリッヒ	
	1960/09/02	C	●	0-8	トルペド・モスクワ（ソ連）	モスクワ	
	1960/09/06	C	●	1-6	パフタコル（ソ連）	タシケント	
	1960/09/09	C	●	1-3	カイラート（ソ連）	アルマアタ	
	1960/09/14	C	○	3-1	ベラルーシ（ソ連）	ミンスク	
	1960/09/20	C	●	2-3	チェコ・ジュニア選抜（チェコ）	チェスコブジェョビッチェ	
	1960/09/22	C	●	2-7	WFVアマ選抜（西ドイツ）	ハーゲン	
	1960/09/27	C	●	1-6	イズミアン・リーグ選抜（英国）	ロンドン	
	1960/09/29	C	△	1-1	テレベ（イタリア）	ローマ	
	1960/11/06	A	●	1-2	韓国	ソウル	W-CUP '62チリ大会アジア地区予選
	1960/11/07	C	△	2-2	全韓国	ソウル	
	1960/11/27	C	●	1-5	ロコモチフ・モスクワ（ソ連）	西京極	
	1960/12/11	C	●	3-10	ロコモチフ・モスクワ（ソ連）	国立競技場	
	1961/03/19	C	●	2-3	マドレーラ（ブラジル）	国立競技場	
	1961/05/28	A	○	3-2	マラヤ	国立競技場	
	1961/06/11	A	●	0-2	韓国	国立競技場	W-CUP '62チリ大会アジア地区予選
	1961/08/02	A	●	2-3	マラヤ	クアラルンプール	
	1961/08/06	A	○	3-1	インド	クアラルンプール	
	1961/08/10	A	●	2-3	ベトナム	クアラルンプール	
	1961/08/15	A	●	0-2	インドネシア	クアラルンプール	
	1961/08/23	C	●	3-5	エッセン・ヘルテン（西独）	エッセン	
	1961/08/26	C	●	3-4	WFVアマ選抜（西独）	ヘアフォート	
	1961/09/06	B	●	1-7	西ドイツ・アマ代表	ブッペルタール	
	1961/09/09	C	●	0-1	プロイセン・ホフランマルク（西独）	レクリングハウゼン	
	1961/09/13	C	○	5-3	トウェンテ選抜（オランダ）	エンスヘーデ	
	1961/09/21	C	●	1-3	コペンハーゲン選抜(デンマーク)	コペンハーゲン	
	1961/11/28	A	●	0-1	ユーゴスラビア	国立競技場	
	1962/05/19	C	●	1-2	WFV選抜（西独）	後楽園	
	1962/05/23	C	●	1-2	WFV選抜（西独）	中日球場	
	1962/05/27	C	●	1-4	WFV選抜（西独）	京都・西京極	
	1962/08/25	A	○	3-1	タイ	ジャカルタ	第４回アジア大会（ジャカルタ）
	1962/08/29	A	●	0-2	インド	ジャカルタ	
	1962/08/30	A	●	0-1	韓国	ジャカルタ	
	1962/09/04	C	○	2-1	パーシブ（インドネシア）	バンドン	
	1962/09/08	A	△	2-2	マラヤ	クアラルンプール	
	1962/09/12	A	△	1-1	パキスタン	クアラルンプール	
	1962/09/15	A	●	1-3	ビルマ	クアラルンプール	

	1962/09/21	A	●	1-2	シンガポール	シンガポール	
長沼　健監督	1962/12/09	B	●	1-5	スウェーデン選抜	後楽園	
	1962/12/11	C	●	2-3	ディナモ・モスクワ（ソ連）	後楽園	
	1963/06/05	B	●	0-4	西ドイツ五輪代表	ジーゲン	
	1963/06/09	C	●	0-5	西ドイツ・ジュニア代表	ノイス	
	1963/06/13	C	●	0-5	西ドイツ・ジュニア代表	ブッペルタール	
	1963/06/16	C	●	1-5	西ドイツ・ジュニア代表	ヘルフォート	
	1963/06/23	C	●	0-5	西ドイツ・ジュニア代表	アウグスブルグ	
	1963/06/26	C	○	4-2	ハイルブロン（西ドイツ）	ハイルブロン	
	1963/06/29	C	○	2-1	北オーストリア選抜（オーストリア）	バイトホーヘン	
	1963/07/03	C	○	2-0	ザルツブルグ（オーストリア）	ザルツブルグ	
	1963/07/07	C	●	3-5	ゼーランド選抜（デンマーク）	コペンハーゲン	
	1963/07/09	C	○	7-3	スコウショブ（デンマーク）	コペンハーゲン	
	1963/08/08	A	○	4-3	マレーシア	クアラルンプール	第7回ムルディカ大会
	1963/08/10	A	○	4-1	タイ	クアラルンプール	
	1963/08/12	A	○	5-1	南ベトナム	クアラルンプール	
	1963/08/13	A	△	1-1	韓国	クアラルンプール	
	1963/08/15	A	●	0-2	台湾	クアラルンプール	
	1963/08/18	C	○	6-1	英軍	クアラルンプール	
	1963/10/12	C	○	2-1	南ベトナム選抜	東京・秩父宮	
	1963/10.14	C	●	1-3	日本B	東京・秩父宮	
	1963/10/16	B	△	1-1	西ドイツ・アマ代表	東京・国立	
	1963/10/20	B	○	4-2	西ドイツ・アマ代表	京都・西京極	
	1964/02/19	C	△	0-0	タイ・バンク（タイ）	バンコク	
	1964/02/21	C	●	1-3	タイ空軍（タイ）	バンコク	
	1964/02/25	C	○	3-0	セランゴール選抜（マレーシア）	クアラルンプール	
	1964/02/27	C	○	1-0	ペラク選抜（マレーシア）	イポー	
	1964/03/01	C	○	3-1	華巫連合（シンガポール）	シンガポール	
	1964/03/03	A	○	2-1	シンガポール（民連隊）	シンガポール	
	1964/07/21	C	●	0-2	ハバロフスク・アーミー(ソ連)	ハバロフスク	
	1964/07/24	C	△	0-0	ロシア共和国選抜（ソ連）	スベルドロスク	
	1964/07/28	B	●	0-1	ソ連選抜（ソ連）	ボルゴグラード	
	1964/07/31	C	●	0-2	ウクライナ選抜（ソ連）	キエフ	
	1964/08/03	C	●	2-3	赤旗クラブ（ルーマニア）	ブラショフ	
	1964/08/09	C	△	1-1	ブログレスール（ルーマニア）	ブカレスト	
	1964/08/12	B	●	1-5	ハンガリー五輪代表	ブダペスト	
	1964/08/19	C	●	1-3	チェコ一部リーグ選抜	プラハ	
	1964/08/28	C	○	3-1	ハイルブロン選抜（西ドイツ）	ハイルブロン	
	1964/08/29	C	○	4-3	ラインラント・アマ（西ドイツ）	ジンチッヒ	
	1964/09/02	C	△	0-0	マインツ05(西ドイツ)	マインツ	
	1964/09/08	C	○	4-0	グラスホッパー（スイス）	チューリッヒ	
	1964/10/14	B	○	3-2	アルゼンチン五輪代表	東京・駒沢	オリンピック・東京大会
	1964/10/16	A	●	2-3	ガーナ	東京・駒沢	
	1964/10/18	B	●	0-4	チェコスロバキア五輪代表	東京・駒沢	
	1964/10/20	B	●	1-6	ユーゴスラビア五輪代表	大阪・長居	
	1965/03/11	A	○	4-1	香港	香港	
	1965/03/14	C	○	2-1	香港リーグ選抜	香港	
	1965/03/17	C	○	3-1	バンコク選抜	バンコク	
	1965/03/21	C	○	2-1	ビルマ・ユース代表	ラングーン	
	1965/03/22	A	△	1-1	ビルマ	ラングーン	
	1965/03/25	A	○	4-1	シンガポール	シンガポール	
	1965/03/27	A	△	1-1	マレーシア	クアラルンプール	
	1965/07/20	C	●	1-2	ロシア共和国選抜（ソ連）	ウーファ	
	1965/07/24	C	△	2-2	アバンギャルド（ソ連）	ハリコフ	
	1965/07/27	C	○	3-2	ネフチャニク（ソ連）	バクー	
	1965/07/30	C	●	1-2	アララート・エレバン（ソ連）	エレバン	
	1965/08/04	C	○	6-4	ケチケメート（ハンガリー）	ケチケメート	
	1965/08/07	C	●	1-4	チェペル（ハンガリー）	ブダペスト	
	1965/08/12	C	○	3-2	ギーセン（西独）	ギーセン	
	1965/08/15	C	○	3-2	ヘッセン・カッセル（西独）	カッセル	
	1965/08/22	C	△	3-3	バードホンブルヒ（西独）	バードホンブルヒ	
	1965/08/25	C	●	5-6	ノイエンドルフ（西独）	コブレンツ	
	1965/12/05	C	●	0-1	AIKストックホルム(スウェーデン)	東京・駒沢	
	1965/12/11	C	●	1-3	トルペド・モスクワ（ソ連）	大阪・長居	
	1966/06/26	C	●	2-4	スターリング・アルビオン	東京・駒沢	
	1966/07/13	C	△	2-2	ザブロージェ選抜（ソ連）	ザブロージェ	
	1966/07/17	C	△	1-1	ドネック選抜（ソ連）	ジュダノフ	
	1966/07/20	C	●	2-4	ロシア共和国選抜（ソ連）	ビヤチゴルスク	
	1966/07/22	B	●	1-3	ソ連五輪代表	ルガンスク	

1966/08/04	C	△	2-2	ザール選抜（西独）	ザールブリュッゲン	
1966/08/06	C	●	1-4	FKビルマーゼンス（西独）	ビルマーゼン	
1966/08/09	C	○	5-3	ハイルブロン選抜（西独）	ハイルブロン	
1966/08/11	C	○	9-1	クーゼル選抜（西独）	ミュールバッハ	
1966/08/13	C	○	2-0	ダルムシュタット（西独）	ダルムシュタット	
1966/08/17	B	●	0-2	西ドイツ五輪代表	ノイイゼンブルグ	
1966/11/28	C	○	8-2	香港選抜	東京・国立	
1966/12/10	A	○	2-1	インド	バンコク	第５回アジア大会（バンコク）
1966/12/11	A	○	3-1	イラン	バンコク	日本３位
1966/12/14	A	○	1-0	マレーシア	バンコク	
1966/12/16	A	○	5-1	シンガポール	バンコク	
1966/12/17	A	○	5-1	タイ	バンコク	
1966/12/18	A	●	0-1	イラン	バンコク	
1966/12/19	A	○	2-0	シンガポール	バンコク	
1967/02/19	B	●	0-2	ソ連五輪代表	東京・国立	
1967/02/26	B	△	0-0	ソ連五輪代表	東京・国立	
1967/05/25	C	●	1-3	Ｍ・ワンダラーズ（英国）	東京・国立	
1967/05/27	C	○	2-1	Ｍ・ワンダラーズ（英国）	東京・駒沢	
1967/05/30	C	●	1-2	Ｍ・ワンダラーズ（英国）	京都・西京極	
1967/06/18	C	●	0-2	パルメイラス（ブラジル）	東京・駒沢	
1967/06/21	C	○	2-1	パルメイラス（ブラジル）	東京・駒沢	
1967/06/25	C	●	0-2	パルメイラス（ブラジル）	東京・駒沢	
1967/07/28	B	●	0-1	ペルーB	リマ	
1967/07/30	B	△	0-0	ペルーB	リマ	
1967/08/08	C	●	0-2	リネンセ（ブラジル）	リンス	
1967/08/10	C	●	0-1	パルメイラス（ブラジル）	サンパウロ	
1967/08/13	C	●	0-2	ブルデンチーナ（ブラジル）	ブレジデンテ	
1967/08/15	C	●	1-2	フェロビアリオ（ブラジル）	アラアツーバ	
1967/09/27	A	○	15-0	フィリピン	東京・国立	オリンピック・メキシコ大会
1967/09/30	A	○	4-0	台湾	東京・国立	アジア地区予選
1967/10/03	A	○	3-1	レバノン	東京・国立	
1967/10/07	A	△	3-3	韓国	東京・国立	
1967/10/10	A	○	1-0	南ベトナム	東京・国立	
1967/12/02	C	△	2-2	CSKAモスクワ（ソ連）	東京・国立	
1967/12/07	C	●	0-2	CSKAモスクワ（ソ連）	大阪・長居	
1967/12/13	C	△	1-1	デュクラ・プラハ（チェコスロ）	京都・西京極	
1967/12/17	C	●	0-2	デュクラ・プラハ（チェコスロ）	東京・国立	
1968/01/17	B	●	0-1	西ドイツ五輪代表	東京・国立	
1968/03/26	B	●	0-4	メキシコ五輪代表	メキシコ市	
1968/03/30	A	△	2-2	豪州	シドニー	
1968/03/31	A	●	1-3	豪州	メルボルン	
1968/04/04	A	○	3-1	豪州	アデレード	
1968/04/06	C	○	2-0	香港リーグ選抜	香港	
1968/05/23	C	●	1-3	アーセナル（英国）	東京・国立	
1968/05/26	C	●	0-1	アーセナル（英国）	福岡・平和台	
1968/05/29	C	●	0-4	アーセナル（英国）	東京・国立	
1968/07/18	C	●	0-2	ロシア共和国選抜（ソ連）	ウリヤノフスク	
1968/07/21	C	●	0-6	ゼニット（ソ連）	レニングラード	
1968/07/24	C	●	1-2	チェルノモレッツ（ソ連）	オデッサ	
1968/07/27	C	●	2-3	モルドバ（ソ連）	キシニョフ	
1968/08/01	B	●	1-3	チェコスロバキア五輪代表	ハラデックラローペ	
1968/08/03	C	●	1-3	リアス・ヤブロネッツ（チェコ）	リベレッツ	
1968/08/07	C	●	2-5	ゴーアヘッド（オランダ）	デペンタール	
1968/08/13	C	●	1-4	Ｂ・メンヘングランドバッハ(西独)	レクリングハウゼン	
1968/08/15	C	○	6-0	レクリング・ハウゼン・アマ(西独)	レクリングハウゼン	
1968/09/13	B	○	4-3	日本選抜	東京・国立	
1968/10/14	A	○	3-1	ナイジェリア	ブエブラ	オリンピック・メキシコ大会
1968/10/16	B	△	1-1	ブラジル五輪代表	ブエブラ	日本３位
1968/10/18	B	△	0-0	スペイン五輪代表	メキシコ市	
1968/10/20	B	○	3-1	フランス五輪代表	メキシコ市	
1968/10/22	B	●	0-5	ハンガリー五輪代表	メキシコ市	
1968/10/24	B	○	2-0	メキシコ五輪代表	メキシコ市	
1969/03/21	C	●	1-3	ベラクルス（メキシコ）	東京・国立	
1969/03/23	C	●	0-1	ベラクルス（メキシコ）	東京・国立	
1969/05/13	C	○	2-1	Ｍ・ワンダラーズ（英国）	東京・国立	
1969/05/15	C	●	1-2	Ｍ・ワンダラーズ（英国）	東京・国立	
1969/06/15	C	●	1-3	Ｂ･メンヘングラッドバッハ（西独）	東京・国立	
1969/06/19	C	△	1-1	Ｂ･メンヘングラッドバッハ（西独）	広島	
1969/06/22	C	●	0-2	Ｂ･メンヘングラッドバッハ（西独）	大阪・長居	

	1969/06/24	C	●	0-1	B･メンヘングラッドバッハ（西独）	東京・国立	
	1969/08/02	C	△	0-0	ヘルツォーゲンアウラッハ（西独）	ヘルツォーゲンアウラッハ	
	1969/08/03	C	●	0-3	バイエルン・ホフ（西独）	ホフ	
	1969/08/06	C	●	2-1	VFRマンハイム(西独)	マンハイム	
	1969/08/09	C	○	0-1	シュワインフルト05（西独）	シュワインフルト	
	1969/08/13	C	●	0-3	ヘッセン・カッセル（西独）	カッセル	
	1969/08/16	C	○	4-3	ストラスブール（フランス）	ストラスブール	
	1969/09/17	C	△	0-0	チェルノモレ・バルナ（ブルガリア）	東京・国立	
	1969/09/19	C	●	1-4	チェルノモレ・バルナ（ブルガリア）	東京・国立	
	1969/09/21	C	●	0-1	チェルモノモレ・バルナ（ブルガリア）	京都・西京極	
	1969/10/10	A	●	1-3	豪州	ソウル	W-CUP　'70メキシコ大会
	1969/10/12	A	△	2-2	韓国	ソウル	アジア・オセアニア地区一次予選
	1969/10/16	A	△	1-1	豪州	ソウル	
	1969/10/18	A	●	0-2	韓国	ソウル	
岡野俊一郎監督	1970/03/08	C	△	1-1	イエテボリ（スウェーデン）	東京・国立	
	1970/03/15	B	○	4-1	日本B	東京・国立	
	1970/03/21	C	△	1-1	フラメンゴ（ブラジル）	神戸・御崎	
	1970/05/26	C	●	1-3	サザンプトン（英国）	東京・国立	
	1970/06/02	C	△	3-3	サザンプトン（英国）	東京・国立	
	1970/06/04	C	●	1-2	サザンプトン（英国）	神戸・御崎	
	1970/06/07	C	●	0-2	サザンプトン（英国）	福岡・平和台	
	1970/07/08	C	●	3-4	コペンハーゲン03（デンマーク）	神戸御崎	
	1970/07/12	C	○	1-0	コペンハーゲン03（デンマーク）	横浜・三ツ沢	
	1970/07/31	A	●	1-2	香港	クアラルンプール	第14回ムルディカ大会
	1970/08/02	A	△	1-1	韓国	クアラルンプール	
	1970/08/04	A	△	0-0	タイ	クアラルンプール	
	1970/08/08	A	○	4-3	インドネシア	クアラルンプール	
	1970/08/10	A	○	4-0	シンガポール	クアラルンプール	
	1970/08/16	A	○	3-2	台湾	クアラルンプール	
	1970/08/25	C	●	0-3	ベンフィカ・リスボン（ポルトガル）	神戸御崎	
	1970/08/29	C	●	1-4	ベンフィカ・リスボン（ポルトガル）	東京・国立	
	1970/09/01	C	●	1-6	ベンフィカ・リスボン（ポルトガル）	東京・国立	
	1970/11/15	C	●	1-6	ユールゴールデン（スウェーデン）	東京・国立	
	1070/11/19	C	●	1-2	ユールゴールデン（スウェーデン）	京都・西京極	
	1970/11/21	C	●	0-3	ユールゴールデン（スウェーデン）	東京・国立	
	1970/11/23	C	○	1-0	ユールゴールデン（スウェーデン）	東京・国立	
	1970/12/10	A	○	1-0	マレーシア	バンコク	第６回アジア大会(バンコク)
	1970/12/12	A	○	1-0	クメール	バンコク	日本４位
	1970/12/14	A	○	2-1	ビルマ	バンコク	
	1970/12/16	A	○	2-1	インドネシア	バンコク	
	1970/12/17	A	○	1-0	インド	バンコク	
	1970/12/18	A	●	1-2	韓国（延長）	バンコク	
	1970/12/19	A	●	0-1	インド(３位決定戦)	バンコク	
	1971/03/07	C	△	0-0	セントジョージ・ブダペスト（豪州）	東京・国立	
	1971/03/14	C	○	1-0	日本B	東京・国立	
	1971/03/21	C	●	1-2	ボルトクルーベン・フレム(デンマーク)	東京・国立	
	1971/05/29	C	●	0-6	トットナム・ホットスパー（英国）	神戸・中央	
	1971/06/03	C	●	2-7	トットナム・ホットスパー（英国）	東京・国立	
	1971/06/09	C	●	0-3	トットナム・ホットスパー（英国）	東京・国立	
	1971/07/07	C	○	2-1	M・ワンダラーズ（英国）	横浜・三ツ沢	
	1971/07/22	C	●	2-4	B･メンヘングラッドバッハ（西独）	メンヘングラッドバッハ	
	1971/07/24	C	●	2-3	ダルムシュタット98（西独）	エルバッハ	
	1971/07/28	B	●	2-3	デンマーク五輪代表	コペンハーゲン	
	1971/08/04	C	●	0-5	ハル・シティ（英国）	ハル	
	1971/08/07	C	●	2-6	サザンプトン（英国）	サザンプトン	
	1971/08/10	C	●	2-7	グリンスビー（英国）	グリンスビー	
	1971/08/13	A	○	2-0	アイスランド	レイキャビク	
	1971/09/02	C	●	0-5	ビットリア・セツバル（ポルトガル）	東京・国立	
	1971/09/04	C	●	2-4	ビットリア・セツバル（ポルトガル）	東京・国立	
	1971/09/23	A	●	0-3	マレーシア	ソウル	オリンピック・ミュンヘン大会
	1971/09/27	A	○	8-1	フィリピン	ソウル	アジア地区予選
	1971/09/29	A	○	5-1	台湾	ソウル	
	1971/10/02	A	●	1-2	韓国	ソウル	
	1972/01/09	C	●	2-3	ハンブルーガーSV(（西独ｊ	東京・国立	
	1972/01/11	C	△	2-2	ハンブルーガーSV(西独)	横浜・三ツ沢	
	1972/05/26	C	●	0-3	サントス（ブラジル）	東京・国立	
	1972/06/04	C	●	0-3	コベントリー・シティ（英国）	名古屋・瑞穂	
	1972/06/06	C	○	1-0	コベントリー・シティ（英国）	東京・国立	
	1972/06/10	C	●	1-2	コベントリー・シティ（英国）	神戸・中央	

長沼　健監督	1972/07/12	A	○	4-1	クメール	クアラルンプール	第１６回ムルディカ大会
	1972/07/16	A	○	5-0	スリランカ	クアラルンプール	
	1972/07/18	A	○	5-1	フィリピン	クアラルンプール	
	1972/07/20	B	○	6-1	ビルマB	クアラルンプール	
	1972/07/22	A	●	1-3	マレーシア	クアラルンプール	
	1972/07/26	A	●	0-3	韓国	クアラルンプール	
	1972/07/28	B	○	1-0	マレーシアB	クアラルンプール	
	1972/08/03	A	○	4-1	フィリピン	シンガポール	
	1972/08/05	A	●	0-1	インドネシア	シンガポール	
	1972/09/03	C	△	2-2	フェレンツバロシュ（ハンガリー）	大阪・長居	
	1972/09/06	C	●	1-3	フェレンツバロシュ（ハンガリー）	東京・国立	
	1972/09/10	C	○	3-1	フェレンツバロシュ（ハンガリー）	広島県営	
	1972/09/14	A	△	2-2	韓国	東京・国立	第１回日韓定期戦
	1973/01/13	C	●	0-1	ウニオン・エスパンヨーラ（チリ）	東京・国立	
	1973/01/15	C	●	2-4	ウニオン・エスパンヨーラ（チリ）	神戸中央	
	1973/01/20	C	●	1-2	ウニオン・エスパンヨーラ（チリ）	東京・国立	
	1973/04/25	C	●	1-4	M・ワンダラーズ（英国）	埼玉・大宮	
	1973/04/26	C	△	1-1	M・ワンダラーズ（英国）	東京・西が丘	
	1973/05/16	A	●	1-2	イスラエル	ソウル	W-CUP '74西ドイツ大会
	1973/05/20	A	○	4-0	南ベトナム	ソウル	アジア・オセアニア地区予選
	1973/05/22	A	●	0-1	香港	ソウル	
	1973/05/26	A	●	0-1	イスラエル（延長）	ソウル	
	1973/06/23	A	●	0-2	韓国	ソウル	第２回日韓定期戦
	1973/06/26	C	●	1-3	IFCケルン（西独）	東京・国立	
	1973/07/01	C	●	0-4	IFCケルン（西独）	大阪・長居	
	1973/07/03	C	●	2-6	IFCケルン（西独）	東京・国立	
	1974/01/13	C	△	0-0	コンスタンツ（ルーマニア）	大阪・長居	
	1974/01/15	B	○	1-0	日本選抜	東京・国立	
	1974/01/20	C	●	0-2	ジュベントス（ブラジル）	東京・国立	
	1974/02/10	C	●	0-1	ジュベントス（ブラジル）	シンガポール	
	1974/02/12	A	○	1-0	シンガポール	シンガポール	
	1974/02/16	B	○	1-0	マレーシア選抜	クアンタン	
	1974/02/20	A	△	0-0	香港	香港	
	1974/03/10	C	●	0-4	ピョンヤン4･25（北朝鮮）	東京・国立	
	1974/06/06	C	●	0-1	M・ワンダラーズ（英国）	神戸・中央	
	1974/06/09	C	●	0-3	M・ワンダラーズ（英国）	東京・国立	
	1974/06/12	C	△	1-1	M・ワンダラーズ（英国）	埼玉・大宮	
	1974/07/01	C	△	0-0	ジーグブルグ（西独）	ケルン	
	1974/07/02	C	○	8-1	VFLケルン99（西独）	ケルン	
	1974/07/07	C	○	1-0	BSCミュンヘン（西独）	ミュンヘン	
	1974/07/14	C	●	1-2	コンスタンツァ（ルーマニア）	コンスタンツァ	
	1974/07/17	C	△	1-1	ウニベルシタット・クルシュ（ルーマニア）	コンスタンツァ	
	1974/07/23	A	●	1-4	ルーマニア	コンスタンツァ	
	1974/08/02	C	△	2-2	ヘルタ・ベルリン（西独）	神戸・中央	
	1974/08/04	C	△	1-1	ヘルタ・ベルリン（西独）	東京・国立	
	1974/08/06	C	●	0-2	ヘルタ・ベルリン（西独）	埼玉・大宮	
	1974/08/16	B	△	1-1	米国アマ代表	埼玉・大宮	
	1974/08/18	B	○	3-0	米国アマ代表	横浜・三ツ沢	
	1974/08/20	B	○	7-0	米国アマ代表	東京・国立	
	1974/09/03	A	○	4-0	フィリピン	テヘラン	第７回アジア大会（テヘラン）
	1974/09/05	A	△	1-1	マレーシア	テヘラン	
	1974/09/07	A	●	0-3	イスラエル	テヘラン	
	1974/09/28	A	○	4-1	韓国	東京・国立	第３回日韓定期戦
	1975/01/05	C	●	0-1	バイエルン・ミュンヘン（西独）	東京・国立	
	1975/01/07	C	●	0-1	バイエルン・ミュンヘン（西独）	東京・国立	
	1975/03/02	B	●	0-1	スエーデン選抜	東京・国立	
	1975/03/05	B	●	1-4	スエーデン選抜	東京・西が丘	
	1975/03/08	B	●	0-2	スエーデン選抜	東京・国立	
	1975/06/14	A	●	0-0	香港（PK戦）	香港	アジアカップ予選
	1975/06/17	A	●	0-1	北朝鮮	香港	
	1975/06/21	A	○	2-1	シンガポール	香港	
	1975/06/23	A	●	1-2	中国	香港	
	1975/06/26	A	○	1-0	香港	香港	
	1975/07/30	A	●	0-2	香港	クアラルンプール	
	1975/08/02	A	●	0-2	マレーシア	クアラルンプール	
	1975/08/04	A	○	3-0	バングラディシュ	クアラルンプール	
	1975/08/07	A	○	4-1	インドネシア	クアラルンプール	
	1975/08/09	A	●	1-3	韓国	クアラルンプール	
	1975/08/11	A	○	4-0	タイ	クアラルンプール	

	1975/08/14	A	○	2-0	ビルマ	クアラルンプール	
	1975/09/08	A	●	0-3	韓国	ソウル	第４回日韓定期戦
	1975/09/11	C	●	2-3	シャムロック・ロバーズ（アイルランド）	東京・国立	
	1975/09/15	C	○	2-0	シャムロック・ロバーズ（アイルランド）	兵庫・鳴門	
	1975/09/17	C	○	1-0	シャムロック・ロバーズ（アイルランド）	東京・西が丘	
	1976/01/25	A	●	1-3	ブルガリア	東京・国立	
	1976/01/28	A	△	1-1	ブルガリア	大阪・長居	
	1976/02/01	A	●	0-3	ブルガリア	東京・国立	
	1976/02/15	C	○	2-1	リエカ（ユーゴスラビア）	東京・国立	
	1976/02/18	C	●	1-2	リエカ（ユーゴスラビア）	名古屋・草薙	
	1976/02/22	C	●	1-2	リエカ（ユーゴスラビア）	東京：国立	
	1976/03/14	A	○	3-0	フィリピン	東京・国立	オリンピック・モントリオール大会
	1976/03/17	A	○	3-0	フィリピン	東京・国立	アジア地区予選
	1976/03/21	A	●	0-2	韓国	東京・国立	
	1976/03/27	A	△	2-2	韓国	ソウル	
	1976/03/31	A	●	0-3	イスラエル	ソウル	
	1976/04/11	A	●	1-4	イスラエル	テルアビブ	
二宮　寛監督	1976/05/21	C	●	0-3	マンチェスター・シティ（英国）	東京・国立	
	1976/05/23	C	●	0-1	マンチェスター・シティ（英国）	名古屋・瑞穂	
	1976/05/26	C	●	0-1	マンチェスター・シティ（英国）	広島県営	
	1976/06/28	C	●	0-2	マンチェスター：シティ（英国）	東京：国立	
	1976/08/08	A	○	5-1	インド	クアラルンプール	第２０回ムルディカ大会
	1976/08/10	A	○	6-0	インドネシア	クアラルンプール	
	1976/08/13	A	△	2-2	ビルマ	クアラルンプール	
	1976/08/16	A	△	2-2	タイ	クアラルンプール	
	1976/08/18	A	△	0-0	韓国	クアラルンプール	
	1976/08/20	A	△	2-2	マレーシア	クアラルンプール	
	1976/08/22	A	●	0-2	マレーシア	クアラルンプール	
	1976/12/04	A	●	1-2	韓国	東京・国立	第５回日韓定期戦
	1977/02/11	C	●	2-3	インデペンディエンテ（アルゼンチン）	東京・国立	
	1977/02/13	C	△	0-0	インデペンディエンテ（アルゼンチン）	大阪・長居	
	1977/02/19	C	●	0-5	B･メンヘングラッドバッハ（西独）	メンヘングラッドバッハ	
	1977/02/23	C	○	2-0	コーポレンス（西独）	コーポレンス	
	1977/03/01	C	●	1-4	IFCケルン（西独）	ケルン	
	1977/03/08	A	●	0-2	イスラエル	テルアビブ	W=CUP '78アルゼンチン大会
	1977/03.10	A	●	0-2	イスラエル	テルアビブ	アジア・オセアニア地区一次予選
	1977/03/26	A	△	0-0	韓国	東京・国立	
	1977/04/03	A	●	0-1	韓国	ソウル	
	1977/06/01	C	○	1-0	IFCケルン（西独）	東京・国立	
	1977/06/05	C	●	0-2	IFCケルン（西独）	東京・国立	
	1977/06/10	C	●	0-3	IFCケルン（西独）	広島県営	
	1977/06/12	C	●	1-3	IFCケルン（西独）	京都・西京極	
	1977/06/15	A	●	1-2	韓国	ソウル	第６回日韓定期戦
	1977/06/28	C	○	3-1	西ドイツ陸軍選抜（西独）	デュイスブルグ	
	1977/06/29	C	○	7-0	ビクトリア・ブッフホルツ（西独）	デュイスブルグ	
	1977/07/05	C	○	3-0	カルクム・ビトラー（西独）	デュイスブルグ	
	1977/07/07	C	●	1-2	シュバルツバイス・デューレン（西独）	デューレン	
	1977/07/09	C	○	2-1	グメルスバッハ（西独）	グメルスバッハ	
	1977/07/10	C	●	2-4	シュバルツバイス・エッセ（西独）	エッセン	
	1977/07/16	C	●	1-3	バイエルン・ホフ（西独）	ホフ	
	1977/07/23	C	△	1-1	ハスフルト（西独）	ハスフルト	
	1977/07/24	C	●	1-3	エクセルシオール（西独）	ロッテルダム	
	1977/07/27	C	○	4-1	エトリンゲン・シュペザクト（西独）	エトリンゲン	
	1977/07/30	C	○	7-0	ビルフェルディンク（西独）	カールスルーエ	
	1977/07/31	C	○	1-0	ベブラ（西独）	ベブラ	
	1977/08/05	C	○	1-0	ローダJC(オランダ)	ケルクラーゲ	
	1977/08/06	C	△	0-0	ベルヒェム・シュポルト（ベルギー）	アントワープ	
	1977/08/13	C	●	0-2	マラガ（スペイン）	マラガ	
	1977/08/15	C	●	2-4	アメリカ（スペイン）	マラガ	
	1977/08/19	C	●	0-2	バリャドリード（スペイン）	バリャドリード	
	1977/08/20	C	●	1-2	ブルゴス（スペイン）	バリャドリード	
	1977/09/14	C	●	1-3	ニューヨーク・コスモス（米国）	東京・国立	
	1978/03/19	C	△	0-0	アムール・ブラゴベシェンスク（ソ連）	東京・国立	
	1978/03/21	C	●	0-1	アムール・ブラゴベシェンスク（ソ連）	大阪・長居	
	1978/03/26	C	●	1-2	アムール・ブラゴベシェンスク（ソ連）	東京・国立	
	1978/05/21	C	●	0-1	コベントリー・シティ（英国）	東京・国立	
	1970/05/23	A	○	3-0	タイ	名古屋・瑞穂	
	1978/05/25	C	△	1-1	IFCケルン（西独）	東京・国立	
	1978/07/13	A	△	0-0	イラク	クアラルンプール	

	1978/07/15	A	●	1-2	インドネシア	クアラルンプール	
	1978/07.17	A	○	3-2	シリア	クアラルンプール	
	1978/07/19	A	●	0-4	韓国	クアラルンプール	
	1978/07/21	A	●	1-4	マレーシア	クアラルンプール	
	1978/07/23	A	●	1-2	シンガポール	クアラルンプール	
	1978/07/26	A	○	4-0	タイ	クアラルンプール	
	1978/08/10	C	○	4-2	SP VGG1903(西独)	不明	
	1978/08/14	C	●	0-2	コベントリー・シティ（英国）	コベントリー	
	1978/08/18	C	●	2-5	ビンタースラッグ（ベルギー）	ヘンク	
	1978/08/20	C	●	2-3	ヘント（ベルギー）	ヘント	
	1978/08/22	C	△	2-2	アントワープ（ベルギー）	アントワープ	
	1978/09/27	C	○	4-0	北京（中国）	東京・国立	
	1978/10/03	C	○	3-1	北京（中国）	東京・国立	
	1978/11/19	A	●	1-4	ソ連	東京・国立	
	1978/11/23	A	●	1-4	ソ連	東京・国立	
	1978/11/26	A	●	0-3	ソ連	大阪・長居	
	1978/12/11	A	●	0-2	クウェート	バンコク	第８回アジア大会（バンコク）
	1978/12/13	A	○	4-0	バーレン	バンコク	
	1978/12/15	A	●	1-3	韓国	バンコク	
下村幸夫監督	1979/03/04	A	○	2-1	韓国	東京・国立	第７回日韓定期戦
	1979/05/27	C	△	1-1	フィオレンティーナ（イタリア）	東京・国立	ジャパンカップ'79
	1979/05/29	C	●	0-2	トットナム・ホットスパー（英国）	東京・国立	
	1979/05/31	A	○	4-0	インドネシア	東京・西が丘	
	1979/06/16	A	●	1-4	韓国	ソウル	第８回日韓定期戦
	1979/06/27	A	△	1-1	マレーシア	クアラルンプール	第２３回ムルディカ大会
	1979/06/29	A	○	2-1	タイ	クアラルンプール	
	1979/07/01	A	○	1-0	ビルマ	クアラルンプール	
	1979/07/04	B	●	0-1	韓国B	クアラルンプール	
	1979/07/08	B	△	0-0	マレーシアB	クアラルンプール	
	1979/07/11	A	△	0-0	インドネシア	クアラルンプール	
	1979/07/13	A	○	3-1	シンガポール	クアラルンプール	
	1979/08/08	C	●	1-2	バレンシア（スペイン）	広島県営	
	1979/08/11	C	●	1-2	アムール・コムソモルスク（ソ連）	不明	
	1979/08/13	C	△	0-0	ウーチ・ウラジオストック（ソ連）	ウラジオストック	
	1979/08/15	C	●	2-4	エスカ・ハバロフスク（ソ連）	ハバロフスク	
	1979/08/19	C	●	0-3	三・八（北朝鮮）	不明	
	1979/08/21	C	△	0-0	海洋（北朝鮮）	不明	
	1979/08/23	A	△	0-0	北朝鮮	平壌	
	1979/10/14	C	△	2-2	ニューヨーク・コスモス（米国）	東京・国立	
	1980/01/27	C	△	0-0	ウイペシュスティ・ドージャ（ハンガリー）	東京・国立	
	1980/01/30	C	●	2-4	ウイペシュスティ・ドージャ（ハンガリー）	埼玉・大宮	
	1980/02/03	C	●	2-5	ウイペシュスティ・ドージャ（ハンガリー）	大阪・長居	
	1980/02/06	C	●	0-3	ウイペシュスティ・ドージャ（ハンガリー）	岡山	
	1980/02/09	C	●	1-4	ウイペシュスティ・ドージャ（ハンガリー）	鴨池	
	1980/02/11	C	△	1-1	ウイペシュスティ・ドージャ（ハンガリー）	京都・西京極	
	1980/03/22	A	●	1-3	韓国	クアラルンプール	オリンピック・モスクワ大会
	1980/03/24	A	○	10-0	フィリピン	クアラルンプール	アジア地区予選
	1980/03/28	A	○	2-0	インドネシア	クアラルンプール	
	1980/03/30	A	△	1-1	マレーシア	クアラルンプール	
	1980/04/02	A	○	2-1	ブルネイ	クアラルンプール	
渡辺正監督	1980/05/25	C	○	3-1	アルヘンチノス・Ｊｒ（アルゼンチン）	東京・国立	ジャパンカップ'80
	1980/05/27	C	●	1-2	ミドルスブラ（英国）	埼玉・大宮	
	1980/06/01	C	●	0-0	エスパニヨール（スペイン）	埼玉・大宮	
	1980/06/09	A	○	3-1	香港	広東	
	1980/06/11	A	●	0-1	中国	広東	
	1980/06/13	C	△	1-1	バカウ（ルーマニア）	広東	
	1980/06/18	A	○	2-0	香港	広東	
	1980/06/20	C	●	0-1	広東（中国）	広東	
川淵三郎監督	1980/11/09	C	●	0-1	ワシントン・ディプロマッツ（米国）	福岡・平和台	
	1980/11/24	C	△	1-1	ワシントン・ディプロマッツ（米国）	東京・国立	
	1980/12/22	A	○	1-0	シンガポール	香港	W-CUP '82スペイン大会
	1980/12/26	A	●	0-1	中国	香港	アジア地区予選
	1980/12/28	A	○	3-0	マカオ	香港	
	1980/12/30	A	●	0-1	北朝鮮（延長）	香港	
	1981/01/25	B	●	0-2	ポーランド選抜	東京・国立	
	1981/01/27	B	●	2-4	ポーランド選抜	徳島	
	1981/01/30	B	●	1-4	ポーランド選抜	名古屋・瑞穂	
	1981/02/01	B	●	0-3	ポーランド選抜	東京・国立	
	1981/02/08	A	●	0-1	マレーシア	クアンタン	

	1981/02/10	A	△	1-1	マレーシア	クアラルンプール	
	1981/02/12	C	●	1-2	タイ・ユース	バンコク	
	1981/02/15	C	○	3-0	ラプラチャ（タイ）	ラプラチャ	
	1981/02/17	A	○	1-0	シンガポール	シンガポール	
	1981/02/19	A	△	0-0	シンガポール	シンガポール	
	1981/02/22	B	△	1-1	インドネシアB	ジャカルタ	
	1981/02/24	A	●	0-2	インドネシア	ジャカルタ	
	1981/02/26	C	○	6-0	フィリピン選抜	マニラ	
	1981/03/08	A	●	0-1	韓国	東京・国立	第９回日韓定期戦
森　孝慈監督	1981/05/31	C	△	2-2	エバートン（英国）	東京・国立	ジャパンカップ'81
	1981/06/02	A	△	0-0	中国	埼玉・大宮	
	1981/06/07	C	●	0-2	クラブ・ブルージュ（ベルギー）	鄭山・開成山	
	1981/06/13	C	●	0-1	ザールブリュケン（西独）	ソウル	韓国大統領杯
	1981/06/15	C	●	0-1	ラシン・コルトバ（アルゼンチン）	韓国・大田	
	1981/06/17	C	○	2-0	シャトール（フランス）	韓国・全州	
	1981/06/19	A	○	2-0	マレーシア	韓国・大邱	
	1981/06/21	A	●	0-2	韓国	釜山	
	1981/08/11	C	△	0-0	ミドルスブラ（英国）	ミドルスブラ	
	1981/08/14	C	○	5-3	トットナム・ホットスパー・ユース（英国）	ロンドン	
	1981/08/15	C	●	1-2	フルハム（英国）	ロンドン	
	1981/08/18	C	△	2-2	ビクトリア・ケルン（西独）	ケルン	
	1981/08/19	C	○	3-0	RWオーバーハウゼン（西独）	オーバーハウゼン	
	1981/09/25	C	△	2-2	バイエルン州選抜（西独）	アウグスブルグ	
	1981/08/30	A	○	2-0	マレーシア	クアラルンプール	第２５回ムルディカ大会
	1981/09/03	A	○	3-2	インド	クアラルンプール	
	1981/09/08	A	○	3-2	アラブ首長国連邦	クアラルンプール	
	1981/09/12	B	●	0-1	ニュージランドB	クアラルンプール	
	1981/09/14	A	○	2-0	インドネシア	クアラルンプール	
	1981/09/18	A	●	0-2	イラク	クアラルンプール	
	1982/01/16	C	△	1-1	ボカ・ジュニアーズ（アルゼンチン）	東京・国立	
	1982/01.20	C	●	2-3	ボカ・ジュニアーズ（アルゼンチン）	神戸・中央	
	1982/01.24	C	●	0-1	ボカ・ジュニアーズ（アルゼンチン）	東京・国立	
	1982/03/21	A	●	0-3	韓国	ソウル	第１０回日韓定期戦
	1982/05/30	C	○	5-2	フェイエノールト（オランダ）	東京・国立	ジャパンカップ'82
	1982/06/02	A	○	2-0	シンガポール	広島県営	
	1982/06/06	C	●	1-2	ベルダーブレーメン（西独）	東京・国立	
	1982/06/09	C	○	5-0	日本鋼管（日本）	東京・国立	
	1982/07/03	C	△	1-1	オスピタレ（スペイン）	バルセロナ	
	1982/07/04	C	○	3-0	シチェス（スペイン）	シチェス	
	1982/07/09	C	○	9-0	ラカバ（スペイン）	ラカバ	
	1982/07/15	A	●	0-4	ルーマニア	スチャバ	
	1982/07/18	A	●	1-3	ルーマニア	ブカレスト	
	1982/07/21	C	●	1-3	フォルツナ・デュッセルドルフ（西独）	ラティンゲン	
	1982/07/23	C	●	0-1	ウニオン・ゾリンゲン（西独）	ゾリンゲン	
	1982/07/25	C	○	1-0	シャルケ04(西独)	ホーヘン・リンブルグ	
	1982/07/27	C	●	1-2	アルメニア・ビーレフェルト（西独）	マストホール	
	1982/07/29	C	●	2-3	リュットリング・ハウゼン（西独）	リュットリング・ハウゼン	
	1982/11/03	C	●	1-3	ニューヨーク・コスモス（米国）	埼玉・大宮	
	1982/11/07	C	●	1-3	ニューヨーク・コスモス（米国）	神戸・中央	
	1982/11/10	C	●	0-1	ニューヨーク・コスモス（米国）	東京・国立	
	1982/11/21	A	○	1-0	イラン	ニューデリー	第９回アジア大会（ニューデリー）
	1982/11/23	A	○	3-1	南イエメン	ニューデリー	
	1982/11/25	A	○	2-1	韓国	ニューデリー	
	1982/11/28	A	●	0-1	イラク（延長）	ニューデリー	
	1983/02/09	C	○	2-0	シリア軍選抜	ダマスカス	
	1983/02/12	A	△	2-2	シリア	ダマスカス	
	1983/02/15	C	△	0-0	クエート選抜	クエート	
	1983/02/17	C	△	1-0	クエート選抜	クエート	
	1983/02/20	B	△	0-0	エジプト五輪代表	カイロ	
	1983/02/22	B	△	0-0	エジプト五輪代表	マハラ	
	1983/02/25	A	●	0-1	カタール	ドーハ	
	1983/03/06	A	△	1-1	韓国	東京・国立	第１１回日韓定期戦
	1983/05/29	C	●	0-4	ニューカッスル・U（英国）	東京・国立	
	1983/06/02	C	△	0-0	ヤマハ発動機（日本）	横浜・三ツ沢	
	1983/06/05	C	●	1-3	ボタフォゴ（ブラジル）	東京・国立	
	1983/06/07	A	○	1-0	シリア	東京・国立	
	1983/07/09	C	△	0-0	ヘッセン・カッセル（西独）	アウロセン	
	1983/07/14	C	●	0-1	アルメニア・ビーレフェルト（西独）	メーダーバッハ	
	1983/07/16	C	△	2-2	フォルクスブルグ（西独）	ホルクスブルグ	

	1983/07/24	C	○	1-0	ノビパザル（ユーゴスラビア）	ノビパザル	
	1983/07/28	C	●	1-2	プリスティナ（ユーゴスラビア）	プリスティナ	
	1983/07/31	C	●	1-2	バルダル（ユーゴスラビア）	スコピエ	
	1983/08/05	C	○	2-1	ジリンガム（英国）	ジリンガム	
	1983/08/09	C	○	2-1	クリスタル・パレス（英国）	ロンドン	
	1983/08/12	C	○	1-0	サウスエンド・ユナイテッド（英国）	サウスエンド	
	1983/08/25	C	△	1-1	ロシア共和国選抜（ソ連）	東京：国立	
	1983/09/04	A	○	7-0	フィリピン	東京・国立	オリンピック・ロスアンジェルス大会
	1983/09/07	A	○	10-1	フィリピン	東京・国立	アジア・オセアニア地区一次予選
	1983/09/15	A	○	2-0	台湾	東京・国立	
	1983/09/20	A	△	1-1	台湾	台湾・台北	
	1983/09/25	A	●	1-3	ニュージランド	オークランド	
	1983/10.07	A	●	0-1	ニュージランド	東京：国立	
	1984/01/14	C	○	2-1	コリンチャンス（ブラジル）	神戸・中央	
	1984/01/16	C	●	1-2	コリンチャンス（ブラジル）	名古屋・瑞穂	
	1984/01/22	C	○	3-2	コリンチャンス（ブラジル）	東京・国立	
	1984/03/06	A	○	7-1	ブルネイ	バンダルスリブガワン	
	1984/03/08	B	○	7-1	ブルネイB	バンダルスリブガワン	
	1984/03/12	C	△	1-1	ヤニタウタマ（インドネシア）	ジャカルタ	
	1984/03/14	C	○	1-0	PSMS（インドネシア）	メダン	
	1984/04/15	A	●	2-5	タイ	シンガポール	オリンピック・ロスアンジェルス大会
	1984/04/18	A	●	1-2	マレーシア	シンガポール	アジア・オセアニア地区最終予選
	1984/04/21	A	●	1-2	イラク	シンガポール	
	1984/04/28	A	●	1-2	カタール	シンガポール	
	1984/05/27	C	●	0-1	トゥールーズ（フランス）	東京・国立	ジャパンカップ'84
	1984/05/31	A	○	1-0	中国	埼玉：大宮	
	1984/09/30	A	○	2-1	韓国	ソウル	第１２回日韓定期戦
	1985/01/12	C	●	1-2	ボルドー（フランス）	東京・国立	
	1985/01/15	C	○	3-0	ボルドー（フランス）	神戸・総合	
	1985/02/17	C	△	0-0	FCチューリヒ（スイス）	東京・西が丘	
	1985/02/23	A	○	3-1	シンガポール	シンガポール	W-CUP アルゼンチン大会アジア一次予選
	1985/03/10	C	△	1-1	大宇（韓国）	釜山	
	1985/03/13	C	●	0-2	油公（韓国）	蔚山	
	1985/03/21	A	○	1-0	北朝鮮	東京・国立	W-CUP '86アルゼンチン大会
	1985/04/30	A	△	0-0	北朝鮮	平壌	アジア一次予選
	1985/05/18	A	○	5-0	シンガポール	東京・国立	
	1985/05/26	A	●	1-4	ウルグアイ	東京・国立	
	1985/05/28	C	△	2-2	ウエスト・ハム（英国）	岡山	
	1985/05/30	C	●	0-1	読売クラブ（日本）	東京・西が丘	
	1985/06/02	C	●	1-4	サントス（ブラジル）	神戸ユニバ	
	1985/06/04	A	○	3-0	マレーシア	名古屋・瑞穂	
	1985/08/11	A	○	3-0	香港	神戸ユニバ	W-CUP '86アルゼンチン大会
	1985/09/22	A	○	2-1	香港	香港	アジア二次予選
	1985/10/26	A	●	1-2	韓国	東京・国立	
	1985/11/03	A	●	0-1	韓国	ソウル	
石井義信監督	1986/05/11	B	○	2-1	アルジェリア選抜	愛媛県営	
	1986/05/14	C	●	0-2	ベルダー・ブレーメン（西独）	東京・国立	
	1986/05/16	C	●	1-2	パルペイラス（ブラジル）	京都・西京極	
	1986/07/23	C	●	1-2	オロモーツ（チェコスロバキア）	クアラルンプール	第３０回ムルディカ大会
	1986/07/25	A	○	2-1	シリア	クアラルンプール	
	1986/07/27	B	○	4-2	中国選抜	クアラルンプール	
	1986/08/01	A	●	1-2	マレーシア（延長）	クアラルンプール	
	1986/09/08	C	●	0-3	サンパウロ州選抜（ブラジル）	東京・国立	
	1986/09/20	A	○	5-0	ネパール	韓国・大田	第１０回アジア大会（ソウル）
	1986/09/22	A	●	0-2	イラン	韓国・大田	
	1986/09/24	A	●	0-2	クエート	韓国・大田	
	1986/09/18	A	○	4-0	バングラディシュ	韓国：大田	
	1987/01/08	C	○	1-0	上海（中国）	上海	
	1987/01/10	C	○	3-0	湖南省（中国）	上海	
	1987/01/13	C	△	1-1	広州（中国）	広州	
	1987/01/15	C	△	0-0	広東省（中国）	広州	
	1997/01/17	C	△	0-0	上海（中国）	上海	
	1987/02.24	C	○	1-0	台北選抜（台湾）	台北	
	1987/03/24	C	△	1-1	大宇（韓国）	釜山	
	1987/04/02	C	●	0-1	日本リーグ選抜（日本）	東京：国立	
	1987/04/08	A	○	3-0	インドネシア	東京・国立	オリンピック・ソウル大会
	1987/04/12	A	○	1-0	シンガポール	東京：国立	東アジア地区一次予選
	1987/05/24	C	△	0-0	フルミネンセ（ブラジル）	東京・国立	キリンカップ'87
	1987/05/27	A	△	2-2	セネガル	広島県営	

	1987/05/29	C	●	0-1	トリノ（イタリア）	名古屋・瑞穂	
	1997/06/14	A	○	1-0	シンガポール	シンガポール	オリンピック・ソウル大会
	1987/06/26	A	○	2-1	インドネシア	ジャカルタ	東アジア地区一次予選
	1987/07/28	C	○	4-3	ブレーメン・アマ（西独）	ブレーメン	
	1987/07/30	C	●	0-3	オルデンブルグ（西独）	オルデンブルグ	
	1987/08/02	C	○	2-0	トウェンテ（オランダ）	ギーテン	
	1987/08/04	C	△	2-2	オーランディア（オランダ）	ホールン	
	1987/08/06	C	○	3-0	カンブーン（オランダ）	レーウワルデン	
	1987/08/09	C	△	1-1	エクセルシオール（オランダ）	ロッテダム	
	1987/08/18	C	●	1-2	大宇（韓国）	釜山	
	1987/09/02	A	△	0-0	タイ	バンコク	オリンピック・ソウル大会
	1987/09/15	A	○	5-0	ネパール	東京・国立	東アジア地区最終予選
	1987/09/18	A	○	9-0	ネパール	東京・国立	
	1987/09/26	A	○	1-0	タイ	東京・国立	
	1987/10/04	A	○	1-0	中国	広州	
	1987/10/26	A	●	0-2	中国	東京・国立	
横山謙三監督	1988/01/27	A	△	1-1	アラブ首長国連邦	ドバイ	
	1988/01/30	A	●	0-2	アラブ首長国連邦	アブダビ	
	1988/02/02	A	△	1-1	オマーン	マスカット	
	1988/05/29	C	●	1-3	フラメンゴ（ブラジル）	東京・国立	キリンカップ'88
	1988/06/02	A	●	0-3	中国	名古屋・瑞穂	
	1988/06/06	C	●	0-1	バイヤー・レバークーゼン（西独）	埼玉・大宮	
	1988/06/23	C	○	10-0	アッシュハイム（西独）	不明	
	1988/06/26	C	△	2-2	MSVミュンヘン（西独）	不明	
	1988/06/30	C	○	3-1	ランドシュット（オランダ）	不明	
	1988/07/02	C	△	4-4	SVザルツブルグ（オーストリア）	不明	
	1988/07/04	C	●	1-3	ランスベルク（西独）	不明	
	1988/07/06	C	○	6-1	FCバッカー（西独）	不明	
	1988/07/09	B	●	0-3	トルコ五輪代表	不明	
	1988/07/12	C	○	2-1	SSVロイトリンゲン（西独）	不明	
	1988/07/14	C	●	0-2	ホンブルグ（西独）	不明	
	1988/07/16	C	●	0-4	SVマンハイム（西独）	不明	
	1988/07/17	C	△	1-1	SVサルムロール（西独）	不明	
	1988/07/18	C	●	0-5	ダルムシュタット（西独）	不明	
	1988/08/12	C	●	0-2	ナポリ（イタリア）	東京・国立	
	1988/09/08	B	●	0-1	アルゼンチン五輪代表	東京・国立	
	1988/09/13	B	△	2-2	ソ連五輪代表	東京・国立	
	1988/10/26	A	●	0-1	韓国	東京・国立	第１３回日韓定期戦
	1988/12/04	B	△	0-0	イラン	ドーハ	アジアカップ（ドーハ）
	1988/12/06	B	●	0-2	韓国	ドーハ	日本代表はBチーム
	1988/12/10	B	●	0-1	アラブ首長国連邦	ドーハ	
	1988/12/12	B	●	0-3	カタール	ドーハ	
	1989/01/19	B	△	2-2	イランB	テヘラン	
	1989/01/22	C	●	1-3	コゼスタン州選抜（イラン）	アフワーズ	
	1989/01/27	C	△	1-1	アル・イッティハード（シリア）	アレッポ	
	1989/01/30	C	○	2-0	スパルタク・ブレンベン（ブルガリア）	アレッポ	
	1989/02/03	C	●	1-2	シリア・ユース（シリア）	アレッポ	
	1989/02/06	C	△	0-0	テシュリエン（シリア）	ラタキア	
	1989/02/08	C	○	4-2	シリア・ユース	ダマスカス	
	1989/05/05	A	●	0-1	韓国	ソウル	第１４回日韓定期戦
	1989/05/10	A	△	2-2	中国	東京・西が丘	
	1989/05/13	A	○	2-0	中国	岡山県営	
	1989/05/22	A	△	0-0	香港	香港	W=CUP '90イタリア大会
	1989/05/28	A	△	0-0	インドネシア	ジャカルタ	アジア地区一次予選
	1989/06/04	A	○	2-1	北朝鮮	東京・国立	
	1989/06/11	A	○	5-0	インドネシア	東京・西が丘	
	1989/06/18	A	△	0-0	香港	神戸・総合	
	1989/06/25	A	●	0-2	北朝鮮	平壌	
	1989/07/09	C	●	1-2	エスツディアンデス（アルゼンチン）	ブエノスアイレス	
	1989/07/11	C	○	2-2	ボカ・ジュニアーズ（アルゼンチン）	ブエノスアイレス	
	1989/07/13	C	●	0-2	インデペンディエンテ（アルゼンチン）	ブエノスアイレス	
	1989/07/18	C	●	0-1	コリチーバ（ブラジル）	クリチーバ	
	1989/07/20	C	●	0-1	ジョインビーレ（ブラジル）	ジョインビーレ	
	1989/07/23	A	●	0-1	ブラジル	リオデジャネイロ	
	1989/07/27	C	●	0-1	パルメイラス（ブラジル）	サンパウロ	
	1989/08/04	C	●	1-3	エバートン（英国）	名古屋・瑞穂	
	1989/08/07	C	●	0-1	マンチェスター・U（英国）	神宮球場	
	1989/08/10	C	△	0-0	ボカ・ジュニアーズ（アルゼンチン）	沖縄県営	
	1990/08/13	C	●	0-1	ボカ・ジュニアーズ（アルゼンチン）	横浜・三ツ沢	

	1990/07/27	A	●	0-2	韓国	北京	第１回ダイナスティカップ（北京）
	1990/07/29	A	●	0-1	中国	北京	
	1990/07/31	A	●	0-1	北朝鮮	北京	
	1990/09/26	A	○	3-0	バングラディシュ	北京	第１１回アジア大会（北京）
	1990/09/28	A	●	0-2	サウジアラビア	北京	
	1990/10/01	A	●	0-1	イラン	北京	
	1991/04/04	C	△	0-0	スパルタク・モスクワ（ソ連）	東京・国立	
	1991/06/02	A	○	1-0	タイ	山形	キリンカップ'91
	1991/06/05	C	○	2-1	バスコ・ダ・ガマ（ブラジル）	京都・西京極	
	1991/06/09	C	○	4-0	トットナム・ホットスパー（英国）	東京・国立	
	1991/07/18	C	△	1-1	パルチザン・ベオグラード（ユーゴ）	埼玉・大宮	
	1991/07/20	C	●	0-1	パルチザン・ベオグラード（ユーゴ）	横浜・三ツ沢	
	1991/07/27	A	●	0-1	韓国	長崎県立	第１５回日韓定期戦
オフト監督	1992/05/31	A	●	0-1	アルゼンチン	東京・国立	キリンカップ'92
	1992/06/07	A	●	0-1	ウエールズ	愛媛	
	1992/03/13	C	○	1-0	デンヘルダー・アマ代表（オランダ）	ザイスト	
	1992/07/15	C	○	2-0	AZ(オランダ)	アルクマール	
	1992/07/17	C	△	0-0	トウェンテ（オランダ）	バスメン	
	1992/08/14	C	△	2-2	ユベントス（イタリア）	神戸ユニバ	
	1992/08/17	C	△	1-1	ユベントス（イタリア）	東京・国立	
	1992/08/22	A	△	0-0	韓国	北京	第２回ダイナスティカップ（北京）
	1992/08/24	A	○	2-0	中国	北京	
	1992/08/26	A	○	4-1	北朝鮮	北京	
	1992/08/28	A	○	2-2	韓国（PK）	北京	
	1992/10/30	A	△	0-0	アラブ首長国連邦	備後	第１０回アジアカップ（広島）
	1992/11/01	A	△	1-1	北朝鮮	広島広域	日本優勝
	1992/11/03	A	○	1-0	イラン	広島広域	
	1992/11/06	A	○	3-2	中国	広島スタジアム	
	1992/11/08	A	○	1-0	サウジアラビア	広島広域	
	1993/02/16	C	●	1-3	ユベントス（イタリア）	レッチェ	
	1993/02/20	C	●	0-3	インターミラノ（イタリア）	レッチェ	
	1993/02/23	C	△	1-1	レッチェ（イタリア）	レッチェ	
	1993/03/07	A	●	0-1	ハンガリー	福岡・博多の森	キリンカップ'93
	1993/03/14	A	○	3-1	米国	東京・国立	
	1993/04/08	A	○	1-0	タイ	神戸ユニバ	W=CUP '94アメリカ大会
	1993/04/11	A	○	8-0	バングラディシュ	東京・国立	アジア地区一次予選
	1993/04/15	A	○	5-0	スリランカ	東京・国立	
	1993/04/18	A	○	2-0	アラブ首長国連邦	東京・国立	
	1993/04/28	A	○	1-0	タイ	ドバイ	
	1993/04/30	A	○	4-1	バングラディシュ	ドバイ	
	1993/05/05	A	○	6-0	スリランカ	ドバイ	
	1993/05/07	A	△	1-1	アラブ首長国連邦	アルアイン	
	1993/09/15	C	●	2-3	レアル・ベティス（スペイン）	セビリア	
	1993/09/21	C	●	1-2	カディス（スペイン）	カディス	
	1993/09/23	C	●	1-2	ヘレス（スペイン）	ヘレス	
	1993/10/04	A	○	1-0	コートジュボアール(延長)	東京・国立	アジア・アフリカ選手権大会
	1993/10/15	A	△	0-0	サウジアラビア	ドーハ	W-CUP '94アメリカ大会
	1993/10/18	A	●	1-2	イラン	ドーハ	アジア地区最終予選
	1993/10/21	A	○	3-0	北朝鮮	ドーハ	
	1993/10/25	A	○	1-0	韓国	ドーハ	
	1993/10/28	A	△	2-2	イラク	ドーハ	
ファルカン監督	1994/05/22	A	△	1-1	豪州	広島広域	キリンカップ'94
	1994/05/29	A	●	1-4	フランス	東京・国立	
	1994/07/08	A	○	3-2	ガーナ	名古屋・瑞穂	アシックスカップ
	1994/07/14	A	○	2-1	ガーナ	神戸ユニバ	
	1994/09/27	A	△	0-0	豪州	東京・国立	
	1994/10/03	A	△	1-1	アラブ首長国連邦	広島・みよし	第１２回アジア大会（広島）
	1994/10/05	A	△	1-1	カタール	広島スタジアム	
	1994/10/09	A	○	5-0	ミャンマー	広島・備後	
	1994/10/11	A	●	2-3	韓国	広島スタジアム	
	1995/01/06	A	●	0-3	ナイジェリア	リヤド	インターコンチネンタル選手権
	1995/01/08	A	●	1-5	アルゼンチン	リヤド	
	1995/02/15	A	●	1-2	豪州	シドニー	
	1995/02/19	B	○	3-0	香港選抜	香港	第３回ダイナスティカップ（香港）
	1995/02/21	A	△	1-1	韓国	香港	日本優勝
	1995/02/23	A	○	2-1	中国	香港	
	1995/02/28	A	○	2-2	韓国（PK）	香港	
	1995/05/21	A	△	0-0	スコットランド	広島広域	キリンカップ'95
	1995/05/28	A	○	3-0	エクアドル	東京・国立	

加茂　周監督	1995/06/03	A	●	1-2	イングランド	ロンドン	インターナショナル・チャレンジ
	1995/06/06	A	●	0-3	ブラジル	リバプール	
	1995/06/10	A	△	2-2	スウェーデン	ノッティンガム	
	1995/08/06	A	○	3-0	コスタリカ	京都・西京極	
	1995/08/09	A	●	1-5	ブラジル	東京・国立	
	1995/09/20	A	●	1-2	パラグアイ	東京・国立	
	1995/10/24	A	○	2-1	サウジアラビア	東京・国立	
	1995/10/28	A	○	2-1	サウジアラビア	愛媛総合	
	1996/02/10	A	○	4-1	豪州	ウーロンゴン	
	1996/02/14	A	●	0-3	豪州	メルボルン	
	1996/02/19	A	○	5-0	ポーランド	香港	カールスバーグカップ
	1996/02/22	A	●	1-1	スウェーデン (PK)	香港	
	1996/05/26	A	○	1-0	ユーゴスラビア	東京・国立	キリンカップ'96
	1996/05/29	A	○	3-2	メキシコ	福岡・博多の森	日本優勝
	1996/08/25	A	○	5-3	ウルグアイ	大阪・長居	
	1996/09/11	A	○	1-0	ウズベキスタン	東京・国立	
	1996/10/13	A	○	1-0	チュニジア	神戸・ユニバ	
	1996/12/06	A	○	2-1	シリア	アルアイン	第１１回アジアカップ（アルアイン）
	1996/12/09	A	○	4-0	ウズベキスタン	アルアイン	
	1996/12/12	A	○	1-0	中国	アルアイン	
	1996/12/15	A	●	0-2	クウェート	アルアイン	
	1997/02/09	A	△	1-1	タイ	バンコク	キングスカップ（バンコク）
	1997/02/11	A	△	1-1	ルーマニア	バンコク	
	1997/02/13	A	●	0-1	スウェーデン	バンコク	
	1997/02/16	A	○	2-0	ルーマニア	バンコク	
	1997/03/01	A	●	1-3	タイ	バンコク	
	1997/03/23	A	○	1-0	オマーン	マスカット	W-CUP '98フランス大会
	1997/03/25	A	○	10-0	マカオ	マスカット	アジア地区一次予選
	1997/03/27	A	○	6-0	ネパール	マスカット	
	1997/05/21	A	△	1-1	韓国	東京・国立	キリンカップ'97　日本優勝
	1997/06/08	A	○	4-3	クロアチア	東京・国立	
	1997/06/15	A	○	1-0	トルコ	大阪・長居	
	1997/06/22	A	○	10-0	マカオ	東京・国立	W-CUP '98フランス大会
	1997/06/24	A	○	3-0	ネパール	東京・国立	アジア地区一次予選
	1997/06/26	A	△	1-1	オマーン	東京・国立	
	1997/08/13	A	●	0-3	ブラジル	大阪・長居	
	1997/08/28	C	△	0-0	Ｊリーグ外国籍選手選抜		
	1997/09/07	A	○	6-3	ウズベキスタン	東京・国立	W-CUP '98フランス大会
	1997/09/19	A	△	0-0	アラブ首長国連邦	アブダビ	アジア地区最終予選
	1997/09/28	A	●	1-2	韓国	東京・国立	
	1997/10/04	A	△	1-1	カザフスタン	アルマトイ	
岡田武史監督	1997/10/11	A	△	1-1	ウズベキスタン	タシケント	予選大会中に監督の交代
	1997/10/26	A	△	1-1	アラブ首長国連邦	東京・国立	
	1997/11/01	A	○	2-0	韓国	ソウル	
	1997/11/08	A	○	5-1	カザフスタン	東京・国立	
	1997/11/16	A	○	2-2	イラン（延長）	ジョホールバル	
	1998/02/15	A	○	3-0	オーストラリア	アデレード	
	1998/03/01	A	○	2-1	韓国	横浜国際	第４回ダイナスティカップ
	1998/03/04	B	○	5-1	香港リーグ選抜		
	1998/03/07	A	●	0-2	中国	東京・国立	
	1998/04/01	A	●	1-2	韓国	ソウル	
	1998/05/17	A	△	1-1	パラグアイ	東京・国立	キリンカップ'98
	1998/05/24	A	△	0-0	チェコ	横浜国際	
	1998/05/31	A	●	1-2	メキシコ		
	1998/06/03	A	●	0-1	ユーゴスラビア	ローザンヌ	
	1998/06/15	A	●	0-1	アルゼンチン	ツールーズ	W-CUPフランス大会　日本予選敗退
	1998/06/21	A	●	0-1	クロアチア	ナント	
	1998/06/26	A	●	1-2	ジャマイカ	リヨン	
	1998/10/28	A	○	1-0	エジプト	大阪・長居	
	1999/03/31	A	●	0-2	ブラジル	東京・国立	
	1999/06/03	A	△	0-0	ベルギー	東京・国立	キリンカップ'99
	1999/06/06	A	△	0-0	ペルー	横浜国際	
	1999/06/29	A	●	2-3	ペルー	パラグアイ・アスンシオン	南米選手権
	1999/07/02	A	●	0-4	パラグアイ	パラグアイ・アスンシオン	
	1999/07/05	A	△	1-1	ボリビア	パラグアイ・カバシェロ	
	1999/09/08	A	△	1-1	イラン	横浜国際	
	2000/02/05	A	●	0-1	メキシコ	香港	カールスバーグ杯
	2000/02/08	B	○	0-0	香港リーグ選抜(PK)	香港	
	2000/02/13	A	○	3-0	シンガポール	マカオ	アジアカップ2000

トルシエ監督	2000/02/16	A	○	9-0	ブルネイ	マカオ	
	2000/02/20	A	○	3-0	マカオ	マカオ	
	2000/03/15	A	△	0-0	中国	神戸・ユニバ	
	2000/04/26	A	●	0-1	韓国	韓国	
	2000/06/04	A	●	2-2	フランス（PK）	モロッコ	ハッサン２世杯
	2000/06/06	A	○	4-0	ジャマイカ	モロッコ	
	2000/06/11	A	△	1-1	スロバキア	宮城	キリンカップ2000
	2000/06/18	A	○	2-0	ボリビア	横浜国際	
	2000/08/16	A	○	3-1	アラブ首長国連邦	広島ビッグアーチ	
	2000/10/04	C	○	2-0	Jリーグ外国籍選手選抜	東京・国立	
	2000/10/08	C	△	1-1	パリ・サンジェルマン(フランス)		
	2000/10/14	A	○	4-1	サウジアラビア	サウジアラビア	アジアカップ(レバノン)
	2000/10/17	A	○	8-1	ウズベキスタン		日本は優勝
	2000/10/20	A	△	1-1	カタール		
	2000/10/24	A	○	4-1	イラク		
	2000/10/26	A	○	3-2	中国		
	2000/10/29	A	○	1-0	サウジアラビア		
	2001/03/24	A	●	0-5	フランス	フランス	
	2001/04/26	A	●	0-1	スペイン	スペイン	
	2001/05/31	A	○	3-0	カナダ	新潟	コンフェデレーションズカップ
	2001/06/02	A	○	2-0	カメルーン	新潟	日本準優勝
	2001/06/04	A	△	0-0	ブラジル	茨城・鹿島	
	2001/06/07	A	○	1-0	豪州	横浜国際	
	2001/06/10	A	●	0-1	フランス	横浜国際	
	2001/07/01	A	○	2-0	パラグアイ	札幌ドーム	キリンカップ2001
	2001/07/04	A	○	1-0	ユーゴスラビア	大分	日本優勝